



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中央アジアに於けるムスリム蜂起と革命：セミレーチエ地方を中心に（1916-1917年）
Author(s)	西山, 克典
Citation	北海道大學文學部紀要, 38(3), 65-106
Issue Date	1990-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33556
Type	departmental bulletin paper
File Information	38(3)_PL65-106.pdf



中央アジアに於けるムスリム蜂起と革命

——セミレーチエ地方を中心に (1916—1917 年)——

西 山 克 典

はじめに——課題の設定——

I 1916 年ムスリム蜂起

II クロバトキン体制

III トルケスタン委員会の設置とセミレーチエ問題

結びにかえて

はじめに——課題の設定——

中央アジア、そして、その南東端で中国と接するセミレーチエ地方をはじめ、帝政ロシアの辺境 = 民族地域に関する革命史研究の枠組は、1930 年代に、ソヴェト史学の成立とともに確定した。だが、この枠組は、革命に関する 1920 年代の様々な論点のいわば否定的総括でもあった。革命直後の 1920 年代には、革命が原住ムスリムを疎外しつつ進展し¹⁾、辺境植民地での土地改革も彼らには成果の少ないものであったとの判断は²⁾、革命家と研究者に共有の見解であった。この疎外の問題は、党とソヴェト権力がおかした大ロシア覇権主義の誤りという認識とも通底し、ロシア人の植民主義 *колонизаторство* の社会的基盤の解明も目指されていた。1920 年代の中央アジア革命史の研究では、このようなムスリム民衆の革命からの疎外性、土地改革の不徹底性、ロシア人が革命を主導したという外来性、さらに、党とソヴェト権力の民族問題での「偏向」などの論点が結びついて、中央アジアの革命は中央ロシアのそれから自立し、独自の律動をもっていたという意味で、その自立(律)的な性格が確認されていた³⁾。このような地域的「自立(律)性 *самостоятельность*」という認識にも支えられて、中央アジアの革命は、「植民地革命 *колониальная революция*」として研究・分析することが模索され、セミ

レーチエ地方は、このような諸論点を明示する一つの有力な論拠として、また、それらの結節として援用されたのである⁴⁾。

だが、1930年代に入ると、ロシア革命史研究の枠組全体が大きく転換した。即ち、『党史小教程』(1938年)に準拠し、党の指導性と階級同盟に基づく二月から十月への革命の「成長転化」というテーゼが定礎された。革命史研究のこの大きな転換、さらには、1930年代の地方史研究の壊滅⁵⁾、地方の民族主義への強い否定的評価という情況は相俟って⁶⁾、中央アジアの革命史研究も大きく転換させることになった。かつての帝政ロシアの辺境・民族地域である中央アジアの革命は、中央ロシアのプロレタリアートの支援をえて、資本主義を飛び越え社会主義に至る革命として位置づけられ、それはロシア革命の「不可分の構成部分」を成すとされ、中央と地方の革命過程の「一体性 единство」が強調されることになった。この「一体性」論の下では、地方の革命は中央の時期区分と同一の枠に押し込まれ、中央のその波及過程と見做された。そして、その遅延と困難に地方の革命の特殊性が探られ、それは結局、地域の「後進性 отсталость」によって説明された⁷⁾。これは、20年代の地域の「自立(律)性」という認識の全否定であり、地方は専ら中央の視点から、中央との「一体性」の下で捉えられることになった。このような「一体性」論は、単一の党中央の指導性を前提にし、長兄ロシア人とプロレタリアートの主導・援助、革命への原住ムスリムの参加と諸民族の友好・共闘を強調する歴史叙述となった。中央アジア革命史研究のこのような転換は、1932年のФ. ボシュコの小冊子にはじまって、セミレーチエに関してはM. H. ポクロフスキーの研究によって体系化された⁸⁾。

スターリン批判とともに、中央アジア革命史の「美化 лакировка」が批判され、「暗部」も研究・言及されるようになった⁹⁾。だが、1930年代に成立した研究の大枠は維持・継承され、従って「一体性」論で説明されえない諸論点は、時として表面へ浮上したが¹⁰⁾、潜伏させられた。フルシチョフ農政の下で処女地開墾キャンペーンが積極的に進められ、後の党書記ブレジネフがカザフ共和国党第二書記として送り込まれてくる状況では、セミレーチエをはじめ中央アジアの植民問題の批判的な史的研究、さらに中央アジア革命

史の枠組を問い直すことは、政治的に困難であった¹¹⁾。欧米では、ソ連とは逆に、革命と共産党への否定的ニュアンスのなかで、ポリシェヴィキーのクー・デターとその地方への波及として革命を把える、セントラリスト史観が基調にあり、結局、地域の革命の自立（律）性は等閑視されることになっている。日本では、木村英亮氏の一連の先駆的な研究があるが、やはり、辺境民族地域の革命を、ロシア革命の時期区分と枠内でとらえ、そのなかで中央アジアの革命の諸困難、「偏向」を問題にしていると思える¹²⁾。

さて、本稿では、以上のような研究状況を考慮し、中央アジアの革命を二月革命の波及から、十月革命とソヴェト権力の樹立、内戦、ネップへの移行という枠内で把える従来の「一体性」論に基づく見解を批判しつつ、その革命の始期を1916年ムスリム蜂起に求め、終期を1921—22年の土地改革とする。この独自の時期区分は、革命に於ける地域の自立（律）性を再考しようとする立場からであるが、同時に、「一体性」論に基づく研究が強調する、入植者、ムスリム原住民など諸民族勤労者の支援・共闘ではなく、むしろ、ムスリム原住民とロシア人を中心とする入植者の、二つの互いに併存・対抗する革命運動を基軸に据えてのことである。具体的には、中央アジアの革命の諸論点の結節を成し、革命の諸矛盾が鮮明に現れた一地域であるセミレーチエ地方に焦点をあて、このことを考えてみたい。セミレーチエ地方への入植の進展、植民地社会の形成とその矛盾の醸成については、既に触れたので¹³⁾、本稿では、1916年のムスリム蜂起、総督クロバトキンの統治体制、1917年のトルケスタン委員会の下でのセミレーチエ地方を対象とする。中央アジアに於ける十月革命とソヴェト権力の樹立、内戦とそれに続く土地問題の解決については、別稿に譲りたい。ロシア革命が、すぐれて、地域と民衆の社会的ベクトルの複合的な所産であるとするならば、革命を中央から一律的に把えるのではなく、地域と民衆の潜勢力を可能な限り掘り下げる知的作業も必要であろう。

注

- 1) З. Миндлин, Киргизы и революция. «Новый Восток», 1924, № 5, с. 217.

- 党中央委員会中央アジア・ビュロー付属の党史編纂委員会が編集した『中央アジアの十月革命』(1928年, タシケント)では, 原住ムスリムの革命への「共感というよりは中立的対応」がみられ, 「党もソヴェト当局にも地方の勤労大衆を自らの側に迅速かつ無碍に引き入れる能力が最初ではなかった」と指摘していた。П. Антропов, Первый съезд Коммунистической партии Туркестана. Истпарт Среднеазиатского ЦК ВКП(б). «Революция в Средней Азии», сб. 1, Ташкент, 1928. с. 17.
- 2) ムスリム共産主義の指導者の一人である Т. Р. Листкурловは, 第12回党大会(1923年)で, 中央部ロシアでは農業改革がなされたが, 多くの辺境地域では, それは事実上存在せず, キルギス(現カザフ)人社会では, どのような変化も生じなかったと述べている。Двенадцатый съезд РКП(б). Стенографический отчет. М., 1968, с. 512-514.
 - 3) Г. Сафаров, Колониальная революция. Ташкент, 1921, с. 61, 75-6.
 - 4) サファエロフとならんで, ガルーズも「植民地革命」の方法を模索していた。П. Г. Галузо, Туркестан — колония. М., 1292; его же, Восстание 1916 г. в Средней Азии. «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 43.
 - 5) См., «История СССР», 1988, № 5, с. 212-213.
 - 6) См., О Некоторых вопросах истории народов Средней Азии, «Вопросы истории», 1951, № 9, с. 14.
 - 7) Э. Генкина, Победа Великой Октябрьской социалистической революции на местах. «Исторический журнал», 1942, № 10, с. 64. このような地方の捉え方は, 「革命と反革命の地域区分に関するテーゼ」として, 後に批判的に言及されることもあった。Е. Н. Городецкий, Некоторые черты современной советской историографии Октябрьской революции. «История СССР», 1967, № 5, с. 18-19.
 - 8) Ф. Божко, Октябрьская революция в Средней Азии. Ташкент, 1932. С. Н. Покровский, Великая Октябрьская социалистическая революция и гражданская война в Семиречье. «Вопросы истории», 1947, № 4. これは, ボクロフスキーの博士号取得論文に基づいたものであるが, 彼は後に, モノグラフィーを著す。С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье. Алма-Ата, 1961.
 - 9) 1957年5月にアルマ・アタで開かれた, 中央アジアの革命に関する研究会議では, その基調報告の一つを読みあげた К. Е. Житовに対し, А. В. Биясコーフスキーが, 党と国家を「美化」していると厳しい批判を行った。Материалы объединенной научной сессии, посвященной истории Средней Азии и Казахстана эпохи социализма. Алма-Ата, 1958, с. 160-161. この会議で П. Н. Соболевは「中央ロシアの革命的諸事件の発展をその辺境地域に機械的に移してはならない, ましてや, トルケスタンのブルジョワ的諸変革を中央ロシアのこれらの諸改革の時期に人工的に追いこんでではない」(傍点強調—引用者)と, 注目すべき発言を行ったが, 大会の論議的にはならなかった。Там же, с. 150. スターリン批判とともに, 党の民族政策の「偏向」と誤りもとりあげられ, 1920年代の土地・水利改革の始期とその性格をめぐって論議がなされるようになった。В. П. Николаева, Турккомиссия как

- полномочный орган ЦК РКП(б). «Вопросы истории КПСС», 1958, № 2; Г. Ф. Дахшлейгер, К истории подготовки постановления ЦК РКП(б) «об основных задачах РКП(б) в Туркестане», «История СССР», 1960, № 2; В. П. Данилов, К итогам изучения истории советского крестьянства и колхозного строительства в СССР. «Вопросы истории», 1960, № 8, с. 42-43.
- 10) 1951年に既に、「一体性」論の枠内に収まらない研究が批判されたが、この批判は、1960年代にも尾を引いている。О некоторых вопросах истории народов Средней Азии. «Вопросы истории», 1951, № 9, с. 9, 11-12, 15; Письмо группы казахских историков, «История СССР», 1962, № 2, с. 229-234; Письмо А. П. Кучкина в редакцию, там же, с. 234-6.
 - 11) 1970年代末に出され『たカザフ共和国史』全五巻では、「一体性」論に基づいて革命の叙述が行われている。История Казахской ССР с древнейших времен до наших дней, Алма-Ата, т. I, 1977, с. 29-30, 42; т. III, 1979, с. 9; т. IV, 1977, с. 8-9.
 - 12) 木村英亮「植民地における革命の構造—中央アジアにおける十月革命—」『比較文化研究』(東大教養部紀要)第六輯, 1965年。この論文で木村氏は、「帝政ロシアの周辺植民地領域の一つであった中央アジアでも11月1日にソヴェト政権が成立し、ロシア・プロレタリア革命の一部を成した」とし、西欧の研究を意識しつつ、この革命が「行政的手段で押しつけられたり、輸出されたものではない」と指摘・批判し、中央アジアの革命はロシア革命を「補い強化した」と、その「一体性」を強調している(傍点強調—引用者)。そして、この革命はプロレタリアートの指導する革命として、非資本主義的発展の道を進んだと説明された。同上, 177-8頁。
 - 13) 拙稿, 「帝政ロシア・セミレーチエ地方に於ける植民の展開」, 『北大史学』第29号(1989年8月)。

I 1916年ムスリム蜂起

第一次大戦への突入によって、帝政ロシアの植民地、中央アジアの社会的矛盾は一層、深化した。植民地における戦時体制は、人員と物資の中央と戦線への動員＝収奪の体制として機能したのであり、原住ムスリムには戦争協力を強い、税と兵役で減免の特典をえていたロシア人をはじめとする入植者には、その特典の削減・撤廃を伴う体制として、立ち現れたのである。植民地トルケスタンへの移民の流入は、戦争とともに減少し、やがて停止するが、原住民からの土地収用と植民フォンドの形成は続けられた¹⁾。中央アジアのムスリム棉作農民には、原棉の固定価格が設定され²⁾、セミレーチエのウイグル、ドゥンガンの農民には、戦時医薬品として不可欠な阿片の調達のため、けし栽培とその固定価格での国家供出が義務づけられた³⁾。このような

耕作強制と低い固定価格での調達は住民に強い不満をもたらした。天幕、フェルト、馬衣など様々の物資の供出と戦時義捐金が強いられ、ロシア人入植村落の出征家族への援農義務さえ原住民に課された⁴⁾。このような戦時体制の下で、原住ムスリムの生活と経営は疲弊しはじめる⁵⁾。他方、入植者住民のもとからも、7月18日の総動員をはじめ、絶えず軍へ成年男子が召集され、入植村落での営農は老人、婦女子に任せられた。彼ら入植農民の生活と経営も、大きな苦境にたち、出征兵士の妻、家族をまきこんだ暴動や⁶⁾、入植村落での出征兵士の妻ら婦人の商品暴動が引き起こされることになる⁷⁾。

このような戦時体制下の植民地で、1916年6月25日に「異族人 инородцы」の後方徴用に関する勅令が出されることによって、その矛盾は爆発する。帝政ロシアのアジア系異民族は、中央アジアのムスリム原住民を含め、「異族人」として兵役を除外されていたが、19～43才までの彼ら成年男子に戦時徴用が命じられたのである⁸⁾。この徴用令は、シベリア南部から中央アジア、カルムイクのステップ、さらにコーカサス地方にまで及ぶ、原住「異族人」の一大反乱を引き起こすことになった。この1916年の反乱は、その叛徒が二月革命まで抵抗を続け、やがて革命と内戦に合流していくステップ地方のトゥルガイ州を除いて、全体として、夏七月から各地で展開し、初秋には、嘗て中央アジア征服にロシアが要したのと同じ規模の軍隊を投入して⁹⁾、漸く鎮圧された。この反乱では、帝政ロシアの統治を通じて強制されたヨーロッパの支配に対する、イスラムや民族的伝統・慣習に基づく抵抗が様々な面でみられた。トルケスタン本土ではロシア支配の拠点たる《新市》に対する《旧市》で、あるいは下級土民行政機関を中心に騒擾がおこり、ステップ地域では、都市や入植村落への牧民の襲撃、交通・通信手段の破壊となつてあらわれた。セミレーチエは、この1916年のムスリム反乱が最も激烈に戦われた地域の一つであった。

セミレーチエ州では、徴用令は7月1日に公布され、原住ムスリムの間の様々な噂、風聞のなかで、徴用者は後方ではなく前線に送られるという「誤った確信」となつて伝播していくことになる¹⁰⁾。緊迫した雰囲気醸成しながら、1916年の蜂起は始まり、展開していくのである。チャルケント郡で

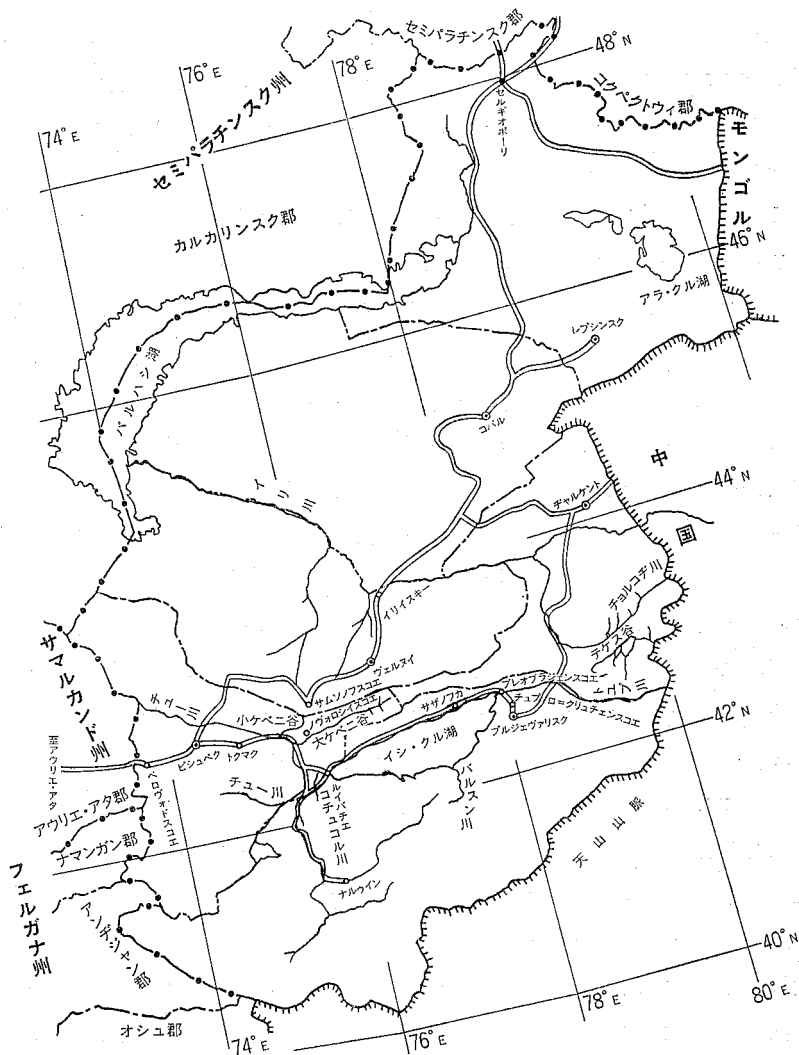
は、郡長事務取り扱いが徴用令を受電したのは7月2日であった。彼は、同日直ちに郡庁官吏、チャルケント＝タランチ郷、チャルケント＝ドゥンガン郷の役人、イスラム導師 мулла、名望家を郡庁へ集め徴用令の説明を行った。そして、スホードと回教寺院で住民に説明し、徴用名簿を作成することが命じられた。4日、5日にはキルギス人の諸郷に対して同様の措置がとられている。チャルケント＝タランチ郷では7月4日にスホードが開かれたが、住民は徴用名簿の作成に反対し、総代 **выборные** は村人全てを従え退去した。郡長は、郷司と書記の説明が不十分であったと判断し、同郷のゴロドスコエ Городское 村のスホードを、再び6日に郡庁で開くことを命じた。6日のスホードでは郡長の説明にも拘らず、村人の一部は総代らと共に徴用名簿の作成に抗議し、示威的に退去した。総代らは役職を解かれ捕縛された¹¹⁾。徴用令の実施への抵抗が始ったのである。

徴用令実施への抵抗形態は多様であった。徴用令の説明される場での示威的な拒否行為、徴用名簿作成の実力阻止とその名簿の破棄、徴用令廃止の請願などは、広くみられた形態であった。さらに、畑ではキルギス人作男が農作業をなげ出し¹²⁾、鉄道建設現場では原住民労務者が立ち去り¹³⁾、駅通からはキルギス人馭者が逃げ¹⁴⁾、徴用令を回避する彼らの逃避・匿伏が、生産と労働の場で引き起こされた。さらには、ステップから山地、バルハシ湖方面の砂地へと畜群を伴っての大規模な逃避・移牧も行れ、中国への越境さえ辞さなかったのである¹⁵⁾。徴用令の布告と実施により、植民地セミレーチエは大きく揺さぶられ、引き裂かれ始めたのである。植民地の行政当局は、郷司、名望家、イスラム導師などを通じて人心の掌握と統治の再建、貫徹をめざすが¹⁶⁾、ロシアの支配を末端で担う郷とアウルの下級土民行政機関は、民衆の抵抗にあって引き裂かれ、機能麻痺に陥ってしまう。また、統治のみならず、植民地の社会生活も、労働と生産の場から原住ムスリムが姿を消し去っていくことにより、鋭く分裂していく。入植村落サムソノフカ Самсоновка では、キルギス人作男が徴用を免れて退去しはじめると、彼らの叛戾に憤った出征兵士の妻らは、力づくでも彼らを働かせようとするのである¹⁷⁾。

7月初めに始まったセミレーチエ州の徴用令実施への様々なかたちでの抵

抗は、8月に入って、同州南部で激烈な反乱となって展開していく。8月7日から8日にかけて、モクシュ・シャブダーノフ Мокуш Шабданов が、サルィバギシュ族（ピシュベク郡トクマク地区）を率いて反乱の狼煙をあげ、これが、チュー川溪谷に沿ってピシュベク郡東部、さらにプルジェヴァリスク郡のイシ＝クル湖盆地、チャルケント郡南部へと急速に波及していったのである。叛徒は入植村落を襲い、焼き払い、ロシア人を略奪し殺害した。主要な交通路である、ピシュベク＝プルジェヴァリスク駅通街道、ルイバチエ＝ナルッイン駅通街道は、彼らに制圧され、橋梁は焼き落とされた。電信線も破壊され、交通・通信網は遮断された。だが、この南セミレーチエの反乱は、8月後半に、増援された軍の懲罰隊によって敗退を強いられ、結局、9月後半から11月初めまでに、叛徒は多大な犠牲を払って、プルジェヴァリスク、ピシュベク両郡から中国領へ逃避し、南セミレーチエの反乱は終わったのである¹⁹⁾。

この反乱は、徴用令実施への散発的な抵抗では最早なく、武器を手にした襲撃、破壊行為であり、ロシアの支配への反乱であった。彼らは《誓約 бата》で結束を堅め、自らのハンを推戴して、戦いを宣布したのである。この反乱の初発での、民衆の結集のあり方については、ピシュベク郡長が11月28日付で、セミレーチエ州軍知事事務取扱いの A. И. アレクセーエフに宛てた報告に詳しい。この報告によると、8月初めにピシュベク郡のキルギス人アテキン族の郷で、「戦争へは行かない。ロシア人と戦って死んだ方がよい。全ての者が必死で事にとりかかり、この戦いにより多くキルギス人を引き加えよう」との「誓約」が行れた。その2～3日後に、彼らは入植村落ノヴォ・ロシイスコエ Ново-Российское の畑で農民の家畜を略奪した。これに、サルィバギシュ族の若者も加わる勢いを示した。8月7～8日にケベニ川をへだてて、両族のキルギス人が結集し、その橋の上には、両郷の名望家、イスラム導師など全てが勢揃いした。アテキン族の郷司、ベレク・ソルタナエフ Белек Солтанаев は、「ロシア人の身ぐるみを剥ぎ、タシケントまで追い払わねばならない。戦闘で死んだ方がよい」と大声で叫んだ。彼に続いて、サルィバギシュ族の信望篤い導師のウマル Умар は、「ここで死ぬのを恐れる



	国 境
	州 境
	郡 境
	市
	入 植 村 落
	主 要 道 路
	河 川

0 80 160 ヴェルスタ

Атлас Азиатской России
Спб., 1914, карта № 35.

な、これは神聖な死だ、そのような人々を天国は待っている」と反乱に向う民衆を鼓舞した。サルィバギシュ族の郷司ケメリ・シャブダーノフ Кемель Шабдановをはじめ、名望家たちは、結集した民衆に、彼らの行為は無益であると訴え、彼らの制止にまわった。だが、民衆は「神聖な死をとろう」と叫びだし、郷司の兄弟であるモクシュ・シャブダーノフをハンに推戴し、その日の内に、ノヴォ・ロシスコエ村の襲撃、焼き打ちが始ったのである¹⁹⁾。この8月8日に、サルィバギシュ族は「徴用者を出さない、ロシア人と戦って死んだ方がよい、キルギス人全てをこの戦いに加わるように説き伏せる」という「誓約」を行い、モクシュ・シャブダーノフを白いフェルトの上に戴きハンと宣言したのである²⁰⁾。原住ムスリムは、彼らの伝統的民族的誓約《бата》で結束を堅め、自らのハンを推戴することで自らの伝統的政治秩序の復位を目指し、その部族的結合を反乱の組織的紐帯へと転用しつつ戦ったのである。「誓約」は、徴用令実施への抵抗のはじまった7月以降、原住民のあいだで何度も行われているが²¹⁾、南セミレーチエの反乱では何人かのハンを生み出す契機とさえなった²²⁾。この反乱は、豪族 манап、名望家、イスラム導師らに領導されたが、彼らはモクシュにみられるように、原住ムスリムの正統性の観念を体現する人物であった。モクシュは、セミレーチエのチュー川溪谷へのロシアの進出に抵抗したことで、この地に知られる豪族 Джантай 孫にあたり²³⁾、原住民からの土地収用をはじめロシア支配の強圧を身をもって体験し²⁴⁾、メッカ巡礼から戻って来たばかりであった²⁵⁾。彼は、この反乱の象徴的存在であったといえよう。

南セミレーチエでのムスリム反乱によって、植民地社会は決定的に分裂・敵対することになった。ロシア人をはじめ入植者の武装化が急進せられ、原住ムスリムに対する虐殺事件が移民によって引き起こされる。州軍知事の М. А. Фюривaum は、8月2日に、郡長と地区警察署長に農民隊の組織を命じ²⁶⁾、州都ヴェルヌイの住民には銃を放出し、義勇隊を組織する措置をとった²⁷⁾。反乱の渦中におかれたピシュペク市では、8月13日に民兵隊 дружина の結成が呼びかけられ、翌日、教会の鐘の音を合図に全ての民兵隊が結集した。16日から18日には、原住民約600名を狩り出して、市にバリケードを

築かせた²⁸⁾。同郡の開拓入植村の全てでも、槍や銃で住民の武装が行れた²⁹⁾。正規軍である懲罰隊は、入植民社会からの志願者で補充・強化され、都市と入植村落は防備を施され、セミレーチエ州の入植民社会の全般的武装化がおこなわれたのである³⁰⁾。このような緊迫した雰囲気の下で、軍・警察、地方当局の制止をふり切って、あるいは黙認の下に、一連の原住民虐殺事件が起こるのである。ピシュペク郡の入植村ベロヴォドスコエ Беловодское では、8月11日から14日にかけて入植農民によって、700人に及ぶ原住キルギス人が殺され、プルジュヴァリスク市では、8月11日から同月下旬までにドゥンガン人約700人が、市近郊のチェプロ・クリュチンスコエ Тепло-Ключинское、プレオブラジェンスコエ Преображенское の入植村落では、何百人ものサルト商人が虐殺された³¹⁾。

中央アジアの1916年ムスリム蜂起は、支配民族たるロシア人社会にも被支配者である原住ムスリム社会にも甚大な被害をもたらした。表1はトルケスタン各州での反乱犠牲者（死者）の内訳を示したものであるが、まず、トルケスタン全体の犠牲者2,301人中、セミレーチエ州に2,110人が集中し、ここがトルケスタンで最大かつ激烈なムスリム蜂起の場となったことが判る。さらに、セミレーチエ州では原住民行政吏員の犠牲者は僅か2名であ

表1 トルケスタン地方のムスリム蜂起被害者（叛徒による殺害者数）

州名	内訳	原住民行政吏員	ロシア人行政吏員	ロシア人移民, コサック, 町人	計
セミレーチエ		2	14	2,094	2,110
スィルダリア		7	3	45	55
サマルカンド		12	3	83	98
フェルガナ		34	1	—	35
ザカスピ		—	3	資料なし	3
計		55	24	2,222	2,301

典拠、П. Г. Галузо, Туркестан-колония, М., 1929, с. 157.

ガルーズは、地方当局がムスリム蜂起の規模を過少に評価しようとしたことを考慮して、表の作成にあたって最大数を採用した。それでも、別の史料は、セミレーチエ州での蜂起のロシア人死者は3,000人を越えると述べている。А. В. Пяско-вский, от. ред., Восстание 1916 года. ..., № 265. с. 399.

表2 セミレーチエ州各郡のムスリム蜂起被害者 (1916年11月1日現在)

郡 名	死 者				行 方 不 明			
	軍人 ¹⁾	行政 吏員	各種 官庁 吏員 ²⁾	民 ロシア人	軍人	行政 吏員	各種 官庁 吏員 ²⁾	民 ロシア人
ヴェルヌイ	—	0	3	18	—	0	0	0
チャルケント	—	0	1	31	—	0	0	20
ピシユペク	—	1	2	97	—	0	0	65
ブルジェヴァリスク	—	1	6	1884	—	0	0	1003
セミレーチエ州計	55	2	12	2030 ³⁾	75	0 ³⁾	0	1088 ³⁾

典拠, А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года ..., № 255, с. 376-7.

1) 軍人は他に負傷者 41 名を出している。там же, с. 376.

2) 史料では **чины развед.** となっており, 史料編者はこれを **чины развед[ки]** 偵察員と解釈している。しかし, これは明らかに **чины раз[ных] вед[омств]** 各種官庁員と理解すべきである。この史料 255 番が添付された, セミレーチエ州軍知事事務取扱いの報告書では, **чины разных ведомств** と明記されているからである。См., там же, № 254, с. 374.

3) 原史料の誤った計算を訂正した。

り, 反乱の鋒先は直接, ロシア人から成るコサック, 移民, 町人など植民社会とロシア人行政吏員に向けられている。これは, フェルガナ, サマルカンド, スィル・ダリア州などのロシア人行政吏員より, 原住民行政吏員に多くの犠牲者を出した地域と異なる特徴を示している。犠牲者の内訳からみられる, いわばフェルガナ型とセミレーチエ型のこの相違は, 基本的には, 中央アジアに於ける相民地化の相異に規定されていた³²⁾。即ち, フェルガナ型では, ムスリム零細農民による棉作モノカルチャー経済の形成による植民地化が進み, そこでの不満がロシア支配の末端を担う土民行政機関の吏員に向けられたのに対し, セミレーチエ型では, 牧民の土地収用とロシア人をはじめとする農民の入植推進の下で, 原住民の不満はロシアの支配と入植社会そのものへ向けられたのである。このように考えると, 1916 年蜂起は, 全体として, 反帝国主義の「進歩的な民族解放運動」と把握しながら, セミレーチエ南部のような移民に多大な犠牲をもたらした地域では, 「封建的 = 教権的分子」によって「反動的な」「民族主義の運動」へ転化させられたとするソヴェト史学の定説³³⁾は再検討を要する。フェルガナ, セミレーチエ両州にそれ

ぞれ典型的な蜂起の社会的性格は、進歩的—反動的の両分的判断によってではなく、植民地化のコースの相異に規定されたものと考えらるべきであろう。セミレーチエ州での被害の実態を、もう少し具体的に検討してみよう。表2は、セミレーチエ州各郡のロシア人被害者（死者と行方不明者）を示したものであるが、同州南部、特にプルジェヴァリスク郡、ついでピシュペク郡で大きな被害が出ている。この犠牲者の圧倒的部分はロシア人入植農民であった。チュー川流域からプルジェヴァリスク郡にわたって、僅かの例外を除き、殆んど全ての彼らの入植村落が、襲われ破壊されたのである³⁴⁾。セミレーチエ州軍知事事務取扱い A. И. アレクセーエフの1917年3月14日付、ツァーリ宛上奏報告では、同州の94の入植村落が襲われ、5,373戸が焼き払われたと指摘されたが³⁵⁾、これは1914年の同州の入植村落191、人口169,322人の過半にも及ぼうとするものであり³⁶⁾、植民社会をまさに震撼させる規模であった。ムスリム原住民の被害も、決してこれに劣ることはなかった。入植者による一連の原住民虐殺事件については、先に言及したが、反乱の敗退過程で軍・行政当局により、彼らの畜群が大量に差し押えられた³⁷⁾。さらに、懲罰隊と移民による制裁・報復をのがれ、人員と畜群を失いながら中国へ越境した数は30万人に及んだ³⁸⁾。州全体で原住ムスリムの人口は3割の減少となったが³⁹⁾、反乱の激しく展開した南セミレーチエのプルジェヴァリスク郡では、34,509の天幕経営 *кибитка* が、1917年1月には8,847へ、ピシュペク郡では、27,831から11,518へ、それぞれ、77.2%、58.6%の減少をきたし、原住ムスリムの牧畜経営は壊滅に近い状態に陥った⁴⁰⁾。

1916年のムスリム蜂起は、原住民の帝政ロシア支配に対する単なる大規模な抵抗・反乱ではなく、いくつかの点で、中央アジアに於ける革命の始まりを告げるものであった。まず、この蜂起の基本的原因が、当地の行政官自らが確認せざるをえなかったように⁴¹⁾、帝政ロシアの植民政策にあり、その矛盾は戦時体制の下で深化し、徴用令の実施によって爆発したのであった。その意味で、これは帝政ロシアの植民政策そのものを否定する反乱であった。

第二に、この蜂起が植民地セミレーチエにもたらした経済的結果、さらに、その政治的雰囲気、この地域のつづく革命と内戦における入植農民、原住

ムスリムの動向を直接、大きく規定することになったことである。甚大な被害を蒙ったロシア人をはじめとする入植農民は、武装し、自力で原住民の家畜・資産を略奪し、土地を占拠し、彼らの損害の補償と営農の再建安定に動き出すのである。他方、在住ムスリムは、反乱の鎮圧により大きな打撃を受け、飢餓と窮乏に打ち拉がれ、ロシア人の植民社会に受動的に対応せざるを得なかった。ここに、中央アジアの革命史研究の一つの基本的論点たる、革命からの在住ムスリムの「疎外」という問題の淵源がある。

第三に、この反乱のなかで、植民地セミレーチエの革命と内戦を闘う基本的な政治潮流が現れ、勢揃いしたことである。在住ムスリム社会のなかからは、モクシュ・シャブダーノフに代表される豪族マナプ、名望家、イスラム聖職者に率られる潮流が現われ、これは後に、ソヴェト権力に抵抗するキルギス人バスマチの系譜に連っていく⁴²⁾。これに対抗して、セミレーチエでは、М. トゥイズィシュパエフ Тынышпаев に代表されるカザフ人民族主義者のグループが、徴用令の実施に協力すべく、積極的に登場してくる⁴³⁾。彼らは、1917年にはアラシュ＝オルダ党をつくっていく。そして最後に、最も微弱であるが、移民局の下級官吏・通辞を嘗て務めたトカシュ・ボキン Токаш Бокин に代表される、徴用令の実施に抵抗し、後の革命派ボリシェヴィキーに加っていくカザフ人革命家の潮流である⁴⁴⁾。他方、ロシア人社会の内部では、ムスリム蜂起の視察後、トルケスタン統治を英仏型の植民地経営として再建しようとする、後の臨時政府首相 А. Ф. ケレンスキーに代表される潮流と⁴⁵⁾、セミレーチエの植民政策に批判的に対応し、後に革命派ソヴェトの指導者となる Б. И. Бройдо Бройдо に連らなる動きである⁴⁶⁾。

反乱の基本的原因、その結果が与えた後の植民地民衆の動向への規定性、反乱のなかで現出した基本的政治潮流、これら全ての点において、1916年ムスリム蜂起は、セミレーチエに於ける革命の始まりを告げるものであった。なるほど、後の革命派を形成するブロイド Б. И. にとっても、Т. リスクロフにとっても、1916年の徴用令とそれにつづく反乱は、彼らの準備のない予期せぬツァーリズムの「挑発」と意識されたとしても⁴⁷⁾、これは、悲劇的な出発であったが、紛れもなく、入植者と在住ムスリムの互いに並存する革

命過程のはじまりであった。だが、その本格的展開を分析するまえに、植民地社会の再編成を目指した、帝政ロシア最後のトルケスタン総督クロバトキンの統治体制を検討しておかねばならない。

注

- 1) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья в 1916 году. Алма-Ата/М., 1936, с. 14; Т. Н. Шарова, Переселенческая политика царизма в Средней Азии. «Исторические записки», т. 8, 1940, с. 30-31.
- 2) П. Г. Галузо, Туркестан-колония, М., 1929, с. 154-5.
- 3) С. Брайнин, Ш. Шафиро, указ. соч., с. 18.
- 4) Г. И. Бройдо, Материалы к истории восстания киргиз в 1916 году. «Новый Восток», 1924, № 6, с. 424-5, 428-9.
- 5) セミレーチエの最後の州軍知事事務扱い А. И. Алексеевは、1917年3月4日付のニコライ二世宛上奏報告で、「全ての原住民が戦費のため進んで惜しげもなく金銭と家畜を寄付した」と述べてつも、しかし、1915年には「一定の《後方》の疲弊」が感じられたと確認せざるをえなかった。А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года в Средней Азии и Казахстане. сборник документов, М., 1960, № 268, 407.
- 6) А. М. Анфимов, ред., Крестьянское движение в России в 1914-1917 гг., сборник документов, М.-Л., 1965, № 58, с. 127-8, 473, 469.
- 7) Там же, № 217, с. 369-370, 500.
- 8) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 1, с. 25-6. 木村氏が既に、この勅令を全文翻訳し、1916年蜂起の概況を紹介している。木村英亮「1916年中央アジア蜂起」、中村平治編『アジア政治の展開と国際関係』（1986年 東京）所収。大崎平八郎編著『ロシア帝国主義研究』（1889年、東京）243-250頁。
- 9) Восстание 1916 г. в Средней Азии. «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 85-86; П. Н. Шарова, указ. статья, с. 36.
- 10) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года ..., № 268, с. 408. この噂さ、風聞を分析すると、ムスリム民衆を反乱に駆り立てた不安、危惧といった彼らの気象 **настроение** の内容が明らかとなる。彼らの間で伝播した噂の核心は二つあった。一つは、後方の徴用労働ではなく、戦線に兵士として、あるいは塹壕掘り、鉄条網切断のために送られ、そこで殺されることへの不安である。もう一つの核心は、徴用されて、彼らの土地はロシア人移民へ与えられることへの危惧・警戒である。この二つの核心は互いに共鳴・増幅し合いながら、一つの強い気象を醸し、それは噂となって伝播したのである。総督 А. Н. Кропоткин が、陸相 Д. С. Шульцァ-Эфヘ宛てた8月18日付の電文では、セミレーチエ南部の反乱の原因の一つとして、「徴用労働者を戦線に送り、皆殺しにするため、ロシア軍とドイツ軍の間におき、土地はロシアの移民に与えようとして、労働者が駆り集められているという噂」が急速に広まったことを指摘している。Там же, № 237, с. 345. 1917年2月の皇帝宛秘密報告

でも、彼は「ありとあらゆる噂さが民衆のなかに急速に広まり、彼らを深く興奮させた」と述べ、この二つの核心を有する「非常に有害な噂」の存在を確認している。
Восстание 1916 г. ..., «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 75.

- 11) А. В. Пясковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 208, с. 323; № 215, с. 327-8.
- 12) Там же, № 210, с. 324; № 251, с. 367.
- 13) Там же, № 229, с. 340.
- 14) Там же, № 251, с. 368.
- 15) Там же, № 268, с. 408.
- 16) Там же, № 217, с. 331.
- 17) Г. И. Бройдо, Материалы к истории..., с. 425.
- 18) А. В. Пясковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 268, с. 409-413; № 254, с. 375; № 461, с. 667.
- 19) Там же, № 261, с. 386-7.
- 20) Там же, № 268, с. 410. このハン即位儀礼は、突厥以来、中央アジアのトルコ系諸民族に踏襲されてきた政治的伝統である。小松久男「アンディジャン蜂起とイシャーン」,『東洋史研究』第44巻4号(1986年),17-18頁,注(52),29頁。
- 21) «бага»は、本来は民俗的な祝福の祈りの儀礼であるが Киргиз-Русский словарь, 1965. М., с. 116; В. N. Shnitnikov, *Kazakh-English Dictionary*, London・The Hague・Paris, 1966, p. 47, 徴用令に抵抗するカザフ、キルギス人によって広く行れた。この抵抗・反乱の《誓約》儀礼の具体的内容は詳びらかでないが、一連の史料から判明する限りでは、徴用令を否認する誓詞が述べられ、つづいて、白い雌馬を屠り、あるいは何らかの生贄を捧げ、血の滴るナイフをかざして堅節を示す儀礼であったと思われる。А. В. Пясковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 221, с. 334; № 265, с. 396-7; прим. 183, с. 730.
- 22) モクシュの他に、トゥベ郷(ブルジュヴァリスク郡)の「信望篤い人」であるバトゥイルハン・ノガエフ Батырхан Ногаев は、ブグ Бугу 族のハンと宣言され、コチュコル郷(ビシュベク郡)の60才の「非常に信望が篤く影響力のある豪族マナープ」のカナアト・アブーキン Канаат Абукин は「コチュコールのハン」と宣布され、反乱を率いたのである。Там же, с. 16, № 251, с. 369; № 256, с. 378; прим. 231, с. 734.
- 23) Там же, № 269, с. 409. 総督クロバトキンは、ロシアのフェルガナ征服の際、ジャンタイ率いるキルギスの支援を得たのを想い起こし、その子孫が今やロシア支配への叛徒と化したことに痛恨の念を抱いている。Там же, № 237, с. 345-6. だが、マナープのジャンタイの行動は、彼らの歴史的な反ウズベクの自立的行動であり、ロシア支援と一義的に解釈すべきではなからう。
- 24) モクシュの属するサルイ・パギシュ族が牧畜するビシュベク郡の郷では、移民局の土地収用に対して、すでに1907年6月に、強い不満が生じていた。《Революционное движение в Казахстане в 1905-1907 годах》, сборник док. и мат. Алма-Ата, 1955, № 251, с. 320; № 257, с. 324-5. 翌1908年には、彼の父シャブдан Шабдан の集落で、大規模な土地収用が行われている。モクシュ自身は、1911年に殺人罪に問わ

- れ、無罪となるが、シャブダンの息子達は、郷の役職から追われ排除された。そして、この時期に移民の入植村ノヴォ・ロシイスコエとサムソノフスコエがつくられたのである。1916年蜂起に先立つ三年前に、シャブダンの息子達は郷の役職に復帰し、蜂起のときには、モクシュの兄弟で郷司のケメリとアマン Аман は叛徒を制止しようとし、反乱のなかで消息を断っている。А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 253, с. 370-371.
- 25) Там же, № 268, с. 410. メッカ巡礼が、ムスリム社会で獲得する権威と影響力は絶大であった。1898年のアンヂジャン蜂起の指導者、モガメット・アリ Могамед-Али が、メッカ巡礼とその後の社会事業を通じて、大きな信望と影響力を得たことを想起されたい。Е. Штейнберг, Андижанское восстание 1898 г., «Красный Архив», 3(88), с. 145-6, 172-3.
- 26) Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года в Казахстане. документы и материалы. 1947., с. 171.
- 27) А. В. Пяковский, от. ред. Восстание 1916 года..., № 219, с. 333.
- 28) Г. И. Бройдо, Материалы к истории..., с. 430-432.
- 29) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 261, с. 385; № 238, с. 367-8.
- 30) Там же, № 254, с. 375.
- 31) ペロヴォドスコエ村の虐殺事件については、次を参照されたい。А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 234, с. 344; № 250, с. 365-6; № 261, с. 386; прим. 200, с. 731; Г. И. Бройдо, Материалы к истории..., с. 431. ブルジェヴァリスク市の虐殺事件については、次を参照。А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 265, с. 399-400; № 259, с. 282-3; прим. 237, с. 734. Чепро-Криученскоエ, Преображенскоエの両村での虐殺については、次を参照。Там же, № 265, с. 401-402, № 248, с. 358. 原住民虐殺の数は、史料・文献によってまちまちであるが、ゾーリンは、イシ=クル湖岸地方で1000人、トクマク近郊で400人、ペロヴォートスコエ郷で600人、ザゴルヌイ地区で800人、クラスノレченскоエ村近郊で200人、計3,000のキルギス人が殺されたとしている。А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизия (северная часть). Фрунзе, 1931, с. 20.
- 32) 木村英亮「モノカルチャー植民地の社会主義的改造—ソ連中央アジアの棉花栽培と農業変革—」『土地制度史学』第34号, 1967年, 22-24頁。拙稿「帝政ロシア・セミレーチエ地方に於ける植民の展開—1867—1914年」『北大史学』第29号(1989年8月) 37-38頁。
- 33) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., с. 6-8, прим. 230, с. 734; Б. С. Сулейменов и В. Я. Басин, Восстание 1916 года в Казахстане. Алма-Ата, 1977, с. 13. ソヴェト史学のこのような両分的評価の枠組は、反乱の鎮圧・対処にあたった帝政ロシアの行政官のなかに、既に胚胎していた。例えば、軍検事長補佐 В. Е. Игнатова-Вичが、1916年12月31日付で総督クロバトキンへ宛てた報告覚え書きを参照せよ。А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 47, с. 69-70.

- 34) Там же, № 254, с. 374.
- 35) Там же, № 268, с. 415. プルジェヴァリスク郡では、全ての入植村落のうち郡市に近い三つの村が襲撃から無事に残ったにすぎない。А. Миклашевский, Социальное движение 1916 г. в Туркестане. «Былое», № 27-28, 1925, с. 264. トロフイーモフは、セミレーチエ州で 35 に至る入植村が壊滅したとしている。Г. Трофимов, Из прошлого компартии в Джетысу. «Коммунистическая мысль», 1927 кн. 3, Ташкент, с. 273. 被害者ロシア人家族とその損害額は文献・史料により多少異っている。См., А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 265, с. 399; прим. 242, с. 735.
- 36) П. Г. Галузо, Аграрные отношения на юге Казахстана в 1867-1914 гг. Алма-Ата, 1965, с. 227.
- 37) А. Н. Зорин, Революционное движение..., с. 20.
- 38) Советское строительство в аулах и селах Семиречья. 1921-1925 гг. сборник документов и материалов, часть 1. Алма-Ата, 1957, док. № 119, с. 180.
- 39) Т. Рыскулов, Из истории борьбы за освобождение Востока (Восстание киргиз Туркестана против царизма в 1916 г.). «Новый Восток», 1924, № 6, с. 267.
- 40) А. Н. Зорин, Революционное движение..., с. 19.
- 41) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 237, с. 345-6; № 254, с. 374; № 268, с. 405-7.
- 42) Дервиш, Басмачество и ферганская проблема. «Жизнь национальностей», 16 сентября 1921 г., с. 2-3.
- 43) М. Туйсуйишубаевは、セミレーチエ州から第二国会へ選出され、カデットと協力して活動を続けた。1916 年の蜂起のなかでは、新任のクロバトキン総督のセミレーチエ巡撫に随行し、原住ムスリムの慰撫に努めるのである。Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., № 20, с. 22, с. 190; С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье. Алма-Ата, 1961, с. 44.
- 44) Токаншю・ボキンの 1916 年蜂起に於ける活動については、次の史料を参照されたい。Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., № 13, с. 14; № 14, с. 15-16; № 122, с. 126; № 135, с. 131; А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 230, с. 340-341; № 231, с. 341-2; № 241, с. 348-9; № 457, с. 664; прим. 195, с. 731, прим. 211, с. 733. Токаншю・ボキンと共に、1916 年蜂起に関わり、後に革命派となる人物に Т. Луискурлов Рыскулов がいる。Луискурловは、セミレーチエ州の生れで、ビшубекの農業学校で学び、1916 年蜂起のときは、隣りのアウリエ・Ата郡で逮捕されている。Т. Р. Рыскулов, Избранные труды. Алма-Ата, 1984, с. 6, 8. 254.
- 45) П. Г. Галузо, ред., Восстание 1916 года в Средней Азии, сборник документов, Ташкент, 1932, с. 4, 10-11, 108.
- 46) J. Castagné, "Le Bolchevisme et l'Islam", *Revue du Monde Musulman*, т. 51, 1922, р. 46, note (1); Г. И. Бройдо, Материалы к истории..., с. 407, 413.
- 47) Т. Рыскулов, Из истории борьбы..., с. 267, 269-270; Г. И. Бройдо, Материалы к истории..., с. 407, 413, 420, 434.

II クロパトキン体制

ムスリム蜂起が始まり、展開するなかで、北部戦線司令官 A. H. クロパトキンは、トルケスタン総督兼トルケスタン軍管区司令官に任命され、8月8日に漸く、総督府のあるタシケントに着任した¹⁾。彼にとって、これは生涯で三度目の中央アジア・ムスリム地域への関与となった。まず、軍人として、この地方で人生の20代から50代まで勤務し、ザカスピ州の軍知事まで務めあげ、次いで、帝政ロシアの植民地支配に大きな衝撃を与えた1898年のアンヂジャン蜂起に、中央政府の陸相として対処した²⁾。そして、今また、徴用令の実施をめぐり引き起こされたムスリム蜂起の展開する最中に、帝政ロシア最後のトルケスタン総督として赴任することになったのである。

中央アジアの植民地で、軍人としての経歴のなかで自己を形成した新総督クロパトキンは、1916年ムスリム蜂起を鎮圧しつつ、セミレーチエ州を中心とする新たな植民地経営論を構想することになる。

激烈な反乱の場となったセミレーチエ地方では、クロパトキン総督の下で厳しい軍事統治の体制が導入された。7月17日にはセミレーチエ州を含むトルケスタン全域に戒厳令が布告され、全ての事件が軍事法廷で、戦時法に基づいて裁かれることになる³⁾。続く21日には、「原住民が群集すること」を禁止し⁴⁾、「ロシアの権力への恭順のあかしとして、将校と全ての官吏を常に起立と辞儀をもって礼容に迎えること」を原住民に求めるようにとの指示が⁵⁾、セミレーチエ州軍知事になされている。さらに、8月以降の南セミレーチエでの反乱の展開のなかで、農民部隊の編成、守備隊の強化とともに、大量の軍隊が反乱鎮圧のために投入された⁶⁾。8月21日付電文で、総督クロパトキンは、セミレーチエ州軍知事フォリバウムの指揮下におかれた軍隊を列挙し、この軍の規模が嘗てロシアがスィルダリア、サマルカンド、フェルガナ地方の征服に要した軍より大きいと指摘し、彼を鼓舞しているのである⁷⁾。このような軍事力を背景にして、ムスリム叛徒への峻厳な鎮圧の体制が築かれたのである。州軍知事は、ピシュペク市地区懲罰隊長に宛て、騒擾の兆しがあれば「二流の首謀者であれ、捕え、軍事裁判に付し、直ちに吊せ」、疑わしいものは誰であれ捕え吊せ」と指示しているのである⁸⁾。徴用令の実施

に抵抗したトカシュ・ボキンには、「彼をつかまえるか、殺すように密かに軍隊に伝えよ」との命令が、州軍知事からピシュベク郡長に発せられていた⁹⁾。

剥き出しの直接の軍事力による叛徒の制圧と原住ムスリムへの威圧とともに、叛徒の分断、懐柔、そして統合をめざす措置がとられた。叛徒の分断と勢力の孤立化のために、原住カザフ、キルギス人の部族的結合も利用された。州軍知事は郡長へ、「精力的に〔部族間の〕党派の分裂を利用せよ、我々の側に一方を引き寄せ、反乱に反対するものへは厚い温情を示せ。……（中略）……敵意をまき、我々の支持者を助けよ」と指示していた¹⁰⁾。さらに総督クロバトキンは、8月17日、20日とたてつづけに、セミレーチエ州の徴用者を6万から4万7千人へと減らし、反乱の鎮圧まで徴用を実施しないことを約し、反乱の波及を防止する措置をとった¹¹⁾。8月23日には、郷とアウル集落の原住民役人、警察吏員、イスラム聖職者、貴族と名誉市民の称号をもつ原住民など名望家層を徴用から免除する総督の指令が出され¹²⁾、原住民名望家層を懐柔し、彼らを社会的挺子にムスリム民衆の体制への統合をはかる措置がとられることになる。クロバトキンは、これらの名望家層と原住民行政機関から、徴用事務を扱う地区委員会を設置した。ここには、ムスリム名望家層のみならず、後のアラシュ・オルダ党をつくるカザフ人民族主義者やイスラム改革派ジャデードも参与・協力していく。セミレーチエ州では、この地区委員会の一つの議長はИ. Жайнаков Джайнаковが務めている。クロバトキンは、ツァーリへの上奏報告のなかで、「各郡で名望ある信頼できる原住民を、労務者徴用事業に直接、参与させることは大きな効果を生んだ」と、その活動の成果を誇っていた¹³⁾。セミレーチエ州では、9月15日から徴用令の実施にふみきった他のトルケスタン諸州とは異なって、「平穏が訪れるまで」その実施は延期されたとはいえ¹⁴⁾、反乱を鎮圧して漸く、10月末から11月初めにかけて、徴用労務者の第一陣が送られることになったのである¹⁵⁾。

軍事力で制圧し、原住民名望家層を懐柔し、彼らを挺子としてムスリム民衆を統合し、徴用者を送り出す体制が整えられたが、セミレーチエの植民地社会は二つの鋭く敵対する社会へ分裂した。反乱のなかで鎮圧され、零落・

窮乏したキルギス人の郷では、ロシア人の復讐を恐れ、要求される労務者、馬匹、天幕などを「不備さしきわりなく」供出せざるを得ず、「強い抑圧状態」に陥った。彼らと入植農民の間には、最早、「相互の信頼」の回復される余地はなかった。フォリバウムに替った州軍知事事務取扱いの A. H. アレクセーエフは、クロパトキンへ宛てた報告覚え書きを次のように結ばざるを得なかった。

「……相互の怨恨、猜疑、そして不信は、長きにわたって平和な善隣関係の確定に対して、由々しき障害となろう。このことは、商業、経営、そしてひどい被害を蒙った地域の経済制度全般に重大な影響を与えていることは疑いない。」¹⁶⁾

ロシア人の復讐を恐れるキルギス人の「打ちひしがれた」気分と、ロシア人住民の、反乱を起こした彼らへの「不満」、¹⁷⁾「敵意」が植民地社会に瀰漫したのである¹⁷⁾。植民地セミレーチエのこのような鋭い社会的分裂と原住民への抑圧のなかで¹⁸⁾、総督クロパトキンは、トルケスタンの遊牧地域での反乱の基本的原因を原住民からの土地収用にあると考え¹⁹⁾、新しい植民プランを構想することになる。

9月13日にクロパトキンは、タシケントで農務省の代表タチーシチェフの報告を聞き、それへの批判的コメントのかたちをとって、彼の植民論を展開することになる。タチーシチェフは、セミレーチエ・コサック軍団に法定男子分与規準の30デシャチーナを確保するために、既に定着営農しているキルギス人から7万デシャチーナの土地を収用することを提案した。これに対し、クロパトキンはロシア人の血の流された所でのみ土地収用を行い、そこにコサック兵村を新設することを提案し、「我々自らが手に入れた水で、自から灌漑した土地にロシア人を扶植し、ロシア的要素を増大せねばならない。だが、ロシア人の入植のために原住民から土地を没収することは、彼らとロシア人の間に不和の種を播き、流血の制裁を準備することになる」と批評した²⁰⁾。農務省が従来通り、キルギス人の可耕地の収用で、入植フンドを確保しようとしたのに対し、蜂起の原因を原住民からの土地の収用にみていたクロパトキンは、ロシア人の血の流された地域でのみ、懲罰的措置とし

て土地収用を行い²¹⁾、そこに植民を進めることを考えたのである。

クロバトキンは10月10日に、反乱の鎮圧を直接指揮するため、M. トゥイヌィシュパエフを伴って、セミレーチエ州に入った²²⁾。ここで、当州の反乱鎮圧過程を直に見聞し、植民地セミレーチエの入植者と原住ムスリム社会への鋭い分裂に接して、彼の植民論の特徴をなす、隔離入植・統治を考えることになった²³⁾。彼の『日誌』は、10月12日のピシュペク滞在のくだりで、新しい植民に想いがめぐらされたことを示している。クロバトキンは、ここで、「セミレーチエに於ける問題をいかに調整し、この豊かな地方で平和な生活をいかに再建し、ロシア人住民とキルギス人をいかに親和させるか」と問い、「可能なところでは長きにわたり、これらの民族を分離することである」との結論をえたのである。彼は、反乱の舞台となった地域からキルギス人を追放し、その土地を没収し、「ロシア人の郡」をつくり、ここには、いくつかのコサック兵村を移し、キルギス人はナルウイン要塞地方に移し、「特別のキルギス人山地郡」を設置するとした。そして、この二つの分離された郡は、鉄道が敷設され、外国資本さえ導入されて、数百万プードの穀物と肉類を冷凍貨車でヨーロッパ・ロシアへ送る繁栄する一大農畜産基地となることが構想された。この構想の下では、隔離された原住キルギス人に与えられる課題は、もはや「定着農耕化 оседлость」を通じて「進歩」に浴することではなく、「生れながらの畜産者であり牧民」、「生れながらの騎兵」、「生れながらの養馬者」として、ロシア陸軍へ騎兵を補充し、軍馬、畜産品を供出することであった。この新しい課題に応えるため、クロバトキンは「彼らを奮い立たせる」ことが必要と考え、そのために学校、とりわけ職業学校を開設し、ロシア語を履修させ、「ロシアの法と文化」に彼らが通じることを求めたのである²⁴⁾。

セミレーチエの植民に関するクロバトキンのこの構想は、10月16日に州都ヴェルヌイで、彼を議長として開かれた会議で、正式に最終的な確定をみる。この会議で、クロバトキンは「ロシアの血が流された全ての土地をキルギス人から収用する」と主張し、ピシュペク郡のケベニ谷、チュー谷の一部、プルジェヴァリスク郡のイン・クル湖岸、ダールケント郡のテケス谷、チョ

ルクデ川地方から、原住民 37,555 経営が追放され、2,510,361 デシャチーナの土地が、彼らから没収されることが決定された。この地区は新しく、プルジェヴァリスク郡として編成され、五つのコサック兵村とロシア人移民の入植村落が扶植されることが確認された。他方、追放される原住民はナルウインを郡市とする特別の郡へ新たに編成されること、「特に罪の重い」サルィバギシュとアテキンの両族は、他の諸郷のアウル集落へ分散移住させるか、バルハン湖岸の荒地へ移すこと、チャルケント郡南部で反乱を起こしたアタバン族は、テケス谷とチョルクデ川地方から追放し、ここに対中国防備のためのコサック兵村を配置することが決定された²⁵⁾。ヴェルヌイ会議の、これらの確認事項を、農務省も基本的に了承し²⁶⁾、追放・隔離されるキルギス人から成る新設のナルウイン郡に、とりあえず、郡長と同補佐 1 名を任命し、彼らの行政経費は、叛徒から没収した畜群の売却でまかなうことになった²⁷⁾。

総督クロバトキンのセミレーチエ植民論は、こうして、9 月 12 日のタシケントでのタチーシチェフへの批判的評言にはじまり、セミレーチエ巡撫のなかで現地の状況にふれ、明確な輪郭をとり、10 月 16 日のヴェルヌイ会議で確定した。これは、その規模に於いて、3 万 7 千余の原住民経営から 250 万デシャチーナの土地を没収し、そこにコサック兵村とロシア人農民の入植を進めようとする遠大な計画であった。ストルィビン時代の積極的移民政策の下で、1906—14 年に移民局が収用した土地が、同州で 270 万デシャチーナであったことを考慮すると²⁸⁾、この計画がそれに匹敵する一時代を画するにふさわしいものであったことが解る。だが、この植民地計画は、帝政ロシアの移民＝入植政策の危機と行き詰まりを示すものであった。第一に、従来の牧民からの「余剰地」収用—入植地フォンドの形式では最早なく、まさに、反乱のなかでのムスリムの大量逃避、鎮圧による追放、逃亡叛徒への厳しい帰国条件の下で²⁹⁾、「ロシア人の血の流された土地」への懲罰的な土地没収を基礎としていた。最早、直接の武力を背景とした懲罰としてしか、入植地の確保ができない危機的状況を示しているのである。第二に、この植民論は、反乱鎮圧後の植民地社会の分裂状態を、クロバトキンのヴェルヌイ会議の言葉を藉りれば、「単に民族的境界に於いてではなく、地理的境界において」³⁰⁾

実現しようとするものであった。この分離・隔離論は、原住民をロシア化しつつ牧民＝畜産者として特化しようとするものであり、従来の植民論の内包する牧民の定着・営農促進という考えの破綻を示すものであった³¹⁾。

このように、クロバトキンのセミレーチエ植民論は、その懲罰的性格と、原住民と入植者の隔離を説く点で、従来の移民入植政策の破綻を示すものであったが、同時に、彼の新しいトルケスタン統治をめざす展望全体のなかでも、要の位置を占めるものであった。彼は隣接するペルシャ、アフガニスタン、中国との安全保障の確保と、州・郡レベルの行政強化による原住民の実効支配を、トルケスタン統治の基本としたが³²⁾、彼の統治を内から支えるのは、ロシア的要素の増大・扶植と原住民のロシア化であった。セミレーチエは、対英協調をはかりつつ、アジア・ロシアの国境地帯を併合・拡大することで安全保障を強化しようとする彼にとって、外交の橋頭堡であり、又、ロシア的要素の最大の扶植地として、彼の統治の社会的基地でもあった。彼の統治におけるセミレーチエのロシア人入植者の重要性については、彼が、1917年2月にツァーリへ宛てた報告で、「国家秩序保持」のため戒厳令に従ってとられた措置は、「現在よりもより良く、トルケスタン地方、とりわけセミレーチエ州のロシア人村落の住民の安全と平穏な活動を保障するためである」と述べていることから窺える³³⁾。クロバトキンのセミレーチエ植民論を、帝政ロシアの政論家が説いてきた従来の三つの論点、即ち、中央ロシアの農業問題解決のための移民・入植、帝国辺境の異民族支配と国境防備の強化、「半ば野蛮な」アジア民衆のヨーロッパ文明への開化、即ち、ロシア化³⁴⁾、との関係で捉えるならば、第一の論点は既にその意義を失い、懲罰的な隔離入植を説く点で、移民・入植の危機と破綻を示すものであったが、同時に第二、第三の論点を継承し、そこへ重点を移しつつ、新しいトルケスタン統治を模索するものであったといえよう。

1916年ムスリム蜂起のなかで、セミレーチエ州の移民＝入植を積極的に支え、推進してきた総督サムソノフと州軍知事フォリバウムの体制は崩れ去り、新総督クロバトキンの下で州軍知事事務取扱いの A. И. アレクセーエフが当州を統治することになった³⁵⁾。クロバトキンは、そのセミレーチエ植民

論を実現することで、新しいトルケスタン統治を展望するが、反乱のなかで深く鋭く分裂し傷ついた植民地社会の矛盾は解消されず、むしろ、体制に常に危機意識を醸すものであった。反乱を誘発した労務者の徴用は、減員・緩和されたが、その達成にははるかに及ばなかった³⁶⁾。徴用労務者自身は、厳しいロシアの労働・自然条件のなかで、ロシアへの反感と帰郷の念を強めていく。さらに、彼らのロシアでの苛酷な状況についての情報がトルケスタンにも伝わり、原住民に不安を与え、彼らの帰郷を求める動きさえ生じた³⁷⁾。他方、植民地セミレーチエの入植者のなかには、当局が反乱を予測できず、被害の補償と援助も十分なされないことへの不満が募った。トルケスタン地区保安部嘱託ユングメイステルの12月30日付報告では、「現在、『お上 начальство』に対して大きな不満が生じており、将来、より面倒な激化事件を引きおこしかねない」と危惧されたのである³⁸⁾。入植者住民の植民地当局へのこの不満は、1910年12月にこの地方を襲った地震をきっかけに、住民の間でみられた高揚した社会的雰囲気を感じ起こさせるが³⁹⁾、この不満の下で入植農民は自立（律）的に動いていくことになる。だが、セミレーチエ州でも、トルケスタン地方全体でも、行政当局はロシア人入植社会よりも、何よりも、原住民の動向を警戒、危惧しつつ⁴⁰⁾、二月革命を迎えることになる。

革命の知らせは、2月28日に届いたが、クロパトキンはこの報道を禁止し、中央の臨時政府の形成をまって、漸く3月3日に公表されることになった⁴¹⁾。中央の臨時政府は、トルケスタン統治を革命後の新しい状況に軟着陸させようと動き出した。3月6日に全般的な政治恩赦の政令が出されたが、これと関連して、トルケスタンでは1916年の蜂起に係る一切の裁判事件は「停止し、永久になかったものとする」と免訴の指示が出された⁴²⁾。これは、反乱後の植民地社会の和解を目指すものであった。8日には、陸相 A. グチコフがクロパトキンの留任を打電し⁴³⁾、11日には、国会議員 И. С. ヴァシーリチコフを臨時政府コミッサールとして派遣し、クロパトキンと共にトルケスタン統治にあたることを伝えてきた⁴⁴⁾。クロパトキンは、このように中央の臨時政府の支持を得て、革命後の「新しい体制」への政治的軟着陸の担い手となる。彼は「偉大な自由ロシア」、「聖なるロシア」を呼号し、戦争完

遂のために「内なる動乱」の発生を警戒し、何より原住キルギス人の脅威を訴えた⁴⁵⁾。彼は、原住キルギス人の動きを危惧し、タシケント兵器庫から大量の銃と弾薬をロシア人住民に引き渡し⁴⁶⁾、セミレーチエ出身の兵士に休暇を与えたのである。1916年蜂起で被害をうけた経営を復興するために休暇を与えられた彼ら兵士は、大挙して武器を携え帰郷し、原住民への暴圧を加速させることになる⁴⁷⁾。だが、クロパトキン体制は、彼が警戒し対抗措置をとった原住ムスリムによってではなく、二月革命の政治的衝撃を受けて、自立的に動きはじめた植民地のロシア人社会、その兵士と労働者によって打倒されることになる。政府コミッサールのヴァシーリチコフの到着をまたずに⁴⁸⁾、3月30日にタシケント労兵ソヴェトは、他の諸組織の代表を加えた合同会議で、クロパトキン以下の総督府高官の解任と自宅軟禁を決定し、翌日には、彼の解任がトルケスタン地方に通報された⁴⁹⁾。かくして、帝政ロシア最後のトルケスタン統治を担ったクロパトキン体制は崩れ去り、彼による新しい体制への軟着陸の試みを押し破って、ロシア人を中心とする植民地民衆の第二の波が激しく押し寄せることになるのである。

注

- 1) П. Г. Галузо, Восстание 1916 г. в Средней Азии. «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 45, 48, 50; Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., с. 167.
- 2) Е. Штейнберг, Андижанское восстание 1898 г. «Красный Архив», 1938, т. 3(88), прим. 1, с. 133.
- 3) Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., № 62, с. 65.
- 4) Там же, № 65, с. 66.
- 5) Там же, № 63, с. 65.
- 6) 結局、セミレーチエの反乱鎮圧のために、三つの民兵隊 дружина (一隊は一連隊に相当する)、七個の予備狙撃兵連隊、五個のコサック騎兵中隊、14門の砲、砲兵中隊と機関銃隊を配備する第七オレンブルグ・コサック連隊と第九シベリア・コサック連隊が、他州から投入された。Там же, № 145, с. 136-7.
- 7) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья в 1916 году, Алма-Ата/Москва, 1936, с. 62.
- 8) Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., № 133, с. 130.
- 9) Там же, № 125, с. 127.
- 10) Там же, № 69, с. 67. 原住カザフ、キルギス人は、牧地の管理を基本とする部族社会で、彼らの間では部族間の抗争がみられたが、帝政ロシアの支配と原住民選出の行

- 政機関の設置によって、この部族闘争 *родовая борьба* は、郷—アウル集落の土民行政機関へも、持ち込まれ、部族間の党派抗争 *партийная борьба* となって現象した。南セミレーチエの蜂起の狼煙をあげたアテキン族とサルイバギシュ族の間でも、この部族闘争が続いており、アテキン族がロシア支配への怨恨をサルイバギシュ族にはらそうとする契機も、反乱への駆動要因として働いていた。А. В. Пясковский, *от. ред., Восстание 1916 года...*, № 253, с. 370-371. セミレーチエの反乱では、従って、それぞれの族 *род* を越えて「誓約 бата」を交すことはなかった。А. Зорин, *Из истории восстания киргизов и казахов в 1916 г. «Борьба классов», № 7-8, 1932, с. 136.* 原住ムスリムが革命から疎外されたという論点とともに、階級闘争ではなく、この部族闘争が革命・内戦期から 1920 年代半ばまで基調をなしたという見解も、この地域の革命史研究の重要な論争点を成しているのである。А. Кучкин, *Советизация казахского аула (1926-1929 гг.) «Вопросы Истории», 1946, № 10, с. 11, 21-22; Письмо группы казахских историков, Письмо А. П. Кучкина в редакцию. «История СССР», 1962, № 2, с. 234-6.*
- 11) Б. С. Сулейменов, *ред., Восстание 1916 года...*, № 129, с. 128-9; А. В. Пясковский, *от. ред., Восстание 1916 года...*, № 30, с. 50; № 48, с. 77.
 - 12) Б. С. Сулейменов, *ред., Восстание 1916 года...*, № 132, с. 129-130.
 - 13) С. Браинин, Ш. Шафиро, *Восстание казахов Семиречья...*, с. 71. 翻訳官 И. Жаинаコフは М. Туйсуйишубаевとともに、クロバトキン総督の下でセミレーチエのムスリム反乱の鎮圧と徴用令の実施に協力する人物である。Там же, с. 44. Танкент市で徴用事務地区委員会を指導したのはジャチード джадидであった。П. А. Ковалев, *Тыловые рабочие Туркестана в годы первой мировой войны (1916-май 1917 гг.)*, Ташкент, 1957, с. 36.
 - 14) Б. С. Сулейменов, *ред., Восстание 1916 года...*, № 136, с. 131.
 - 15) С. Браинин, Ш. Шафиро, *Восстание казахов Семиречья...*, с. 71.
 - 16) А. Чулошников, *К истории восстания киргиз в 1916 г. «Красный Архив», т. 16, 1926, с. 74-75; А. В. Пясковский, от. ред., Восстание 1916 года...*, № 254, с. 376.
 - 17) Там же, № 261, с. 389.
 - 18) 反乱鎮圧後のこのような状況を、「蜂起の前には、殆んど全ての〔ロシア人〕農民の許でキルギス人が働いていたが、しかし〔今は〕彼らはロシア人に近寄ろうとさえしない。というのは、ロシア人はその残虐さにおいて、少しもキルギス人に劣らないからである」と、トルケスタン地区保安部囑託のユングメイステルは、12月30日付の報告で指摘している。Там же, № 265, с. 398.
 - 19) П. Г. Галузо, *Восстание 1916 г. в Средней Азии. «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 41, 65, 77-78.*
 - 20) Там же, с. 55.
 - 21) クロバトキンは、陸相としてアンデジャン蜂起に対処した際に、既に原住民叛徒からの土地没収とそこへのロシア人農民の入植を、懲罰的措置として採用している。Е. Штейнберг, *Андижанское восстание 1898 г. «Красный Архив», т. 3 (88), 1938, с. 128, 143, 175, 178.* 土地を取りあげられ追放された叛徒は、わずかの土地に慈悲

- Мархамат 村をつくり、嘗ての叛徒の村ミン・チュベ Мин-Тюбе は、ロシアの威信を示すかのごとく、多くの灌漑地をもつ入植農民のロシア Русское 村へ変った。
- В. В. Бартольд, История культурной жизни Туркестана. Л., 1927, с. 157. 1916年ムスリム蜂起で「ロシア人の血の流された」サマルカンド州ジザック郡でも、懲罰的措置として、土地没収と入植プランが、クロバトキンによってたてられている。П. Г. Галузо, Восстание 1916 г..., «Красный Архив», т. 34, 1929, с. 87, 93.
- 22) Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., с. 184.
- 23) 原住民の追放と隔離は、軍事措置として、反乱鎮圧過程で既に採用されていた。9月24日付で、セミレーチエ州軍知事が懲罰隊長へ宛てた電文では、原住民が「永久に」追放され、今後「純粋にロシア人の地区」となる地域、キルギス人の立ち入りを禁止し「無条件の恭順」を示したもののみ、徐々に移住が許可される地域を、それぞれ具体的に指示し、「最も罪の重い郷」であるサルイバギシュとアテキン族は、「全く特別に別の郡」へ移住させると述べていた。Там же, № 139, с. 132-3. クロバトキンの隔離・入植論は、このようなセミレーチエの反乱鎮圧の実態に依拠して考えられたのであろう。
- 24) П. Г. Галузо, Восстание 1916 г., «Красный Архив», т. 34, 1929, с. 60-61.
- 25) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 488, с. 684-687.
- 26) Там же, № 262, с. 390-391.
- 27) П. Г. Галузо, Восстание 1916 г., «Красный Архив», т. 34, 1929, с. 92-93.
- 28) 拙稿「帝政ロシア・セミレーチエ地方に於ける植民の展開」『北大史学』第29号(1989年8月)47頁。
- 29) А. В. Пяковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 487 с. 684.
- 30) Там же, № 488, с. 685.
- 31) 嘗て州軍知事のフォリバウムは、原住民を定着農耕化させ、「普通のロシアの農民」をつくる「素材」とのみ、みなすと豪語していた。Рабочее и аграрное движение в Казахстане в 1907-1914 годах. сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1957, с. V-VI, № 253, с. 361. クロバトキンは、反乱の原因に牧民からの土地収用をみて、移民入植政策を批判するなかで、原住民の農耕定着への強制ではなく、牧民への特化を説くに至るのである。彼はセミレーチエ巡察後も、彼の『日誌』のなかで、「牧民として養馬者として、彼らは劣った農民以上にロシアに有益であろう」と強調するのである。П. Г. Галузо, Восстание 1916 г..., «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 65-66.
- 32) Там же, с. 82-83.
- 33) Там же, с. 85.
- 34) 第三国会議員で1909年夏にセミレーチエを視察した右派オクチャブリストの А. Л. Трегубовの植民論に、これらの論点が明瞭に窺える。А. Л. Трегубов, Переселенческое дело в Семипалатинской и Семиреченской областях. «Вопросы колонизации», № 6, 1910, с. 140, 169, 172. Трегубовは、第四国会でも移民問題委員会に属して活躍するが、1916年ムスリム蜂起を審議した1916年12月15日の議場では、「やめろ」の野次のなかで発言できなかった。П. Г. Галузо, ред., Восстание 1916 года в Средней Азии. сборник документов, Ташкент, 1936,

- c. 161. 国会での彼のこの苦境に、彼に代表される帝政ロシアの植民論の危機も窺えるのである。
- 35) フォリバウムの州軍知事としての活動は、9月24日まで確認できる。9月26日にはアレクセーエフが州軍知事事務取扱いとして執務しているから、フォリバウムは9月25日に辞任したと推定できる。См., А. В. Пясковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 248, с. 355; № 477, с. 676.
- 36) トルケスタンでの徴用は、当初の25万から20万へ、セミレーチエ州では6万から4万5千人へと減員されていた。Там же, № 30; с. 50; № 48, с. 77. だが、1917年2月1日までに、トルケスタンでの徴用者数は12万人と計画を大幅に割っていたのである。П. Г. Галузо, Восстание 1916 г..., «Красный Архив», 1929, т. 34, с. 80.
- 37) Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., № 146, с. 137.
- 38) А. В. Пясковский, от. ред., Восстание 1916 года..., № 265, с. 400.
- 39) Рабочее и аграрное движение в Казахстане в 1907-1914 годах, док. № 264, с. 377.
- 40) Веллсмуй市警察署長は、1917年1月19日付の報告で、原住民の不穏な働きを指摘し、前年8月の蜂起前夜に似ていると警告していた。Б. С. Сулейменов, ред., Восстание 1916 года..., с. 193-4. クロバトキンも、セミレーチエ州では春の牧草が芽ばえと、原住民が軍事行動をおこすのではないかと危惧していた。П. Г. Галузо, Восстание 1916 г..., с. 81-82.
- 41) Д. И. Соيفер, Солдатские массы в борьбе за победу Великой Октябрьской соц. рев. в Туркестане. (март-ноябрь 1917 г.), «Исторические Записки», т. 64, 1959, с. 50.
- 42) R. P. Browder and A. F. Kerensky ed., *The Russian Provisional Government 1917. Documents*. Stanford, 1961, p. 197.
- 43) П. А. Ковалев, Тыловые рабочие Туркестана в годы первой мировой войны (1916-май 1917 гг.), Ташкент, 1957, с. 151.
- 44) «Победа Октябрьской революции в Узбекистане», сборник документов, Т. I. Ташкент, 1963, № 11, с. 36. ヴァシーリチコフ公は、第四国会議員で、国会の移民委員会のメンバーでもあった。Государственная Дума. Обзор деятельности комиссий и отделов. четвертый созыв. сессия I, 1912-1913 г. Спб., 1913, с. 208.
- 45) J. Castagné, "Le Turkestan depuis la révolution russe", *Revue de Monde Musulman*, No. L (June 1922), pp. 32-35; П. А. Алексенков, Национальная политика Временного Правительства в Туркестане в 1917 г. «Пролетарская революция», 8 (LXXIX), 1928, с. 106.
- 46) «Революционное движение в России после свержения самодержавия». документы и материалы. М., 1957, док. № 719, с. 742.
- 47) П. А. Алексеенков, Национальная политика..., с. 117.
- 48) Там же, с. 107.
- 49) «Победа Октябрьской революции в Узбекистане», сб. документов, Т. I. № 23, с. 53.

III トルケスタン委員会の設置とセミレーチエ問題

クロパトキンの自宅軟禁と総督解任から一週間後の、4月7日に、臨時政府はトルケスタン委員会を設置し、トルケスタン五州とヒヴャ、ブハラ²の二保護国で、臨時政府の名の下に行動することを命じた。この委員会は、議長³の H. H. シチェプキン Щепкин (カデット) 以下、国会のカデットとムスリム議員を主流に、植民地の軍人・官僚の実務派を補って、9人で構成された。この9人のなかに、セミレーチエ州へコミッサールとして派遣される、エス・エルの傾向の O. A. シュカプスキーと、カザフ人民族主義者の M. トゥイヌィシュパエフも含まれていた⁴。

トルケスタン委員会は、トルケスタンに於けるツァーリ政府の統治を批判し、都市自治の拡充とゼムストヴォ導入などを掲げつつ、新しく英仏型の植民地経営をめざそうとした。4月にトルケスタン委員会の主宰で開かれたトルケスタン地方会議は、原住諸民族への自治付与は斥けつつ、「英仏植民地のように整序化されねばならない」と決定している⁵。このような統治=政治改革を掲げつつも、旧来の土地政策に係る植民行政は継承されていくことになる。臨時政府は、ロシア中央部の農民に地主地などの不法占拠を控え、憲法制定会議での土地問題の解決を待ち、播種と食糧増産に励むことを訴えたが、辺境入植地の移民に対しても、入植地=国有地フォンドの占拠、国有地の借地料不払い、森林盗伐などを非難しながら、やはり憲法制定会議での土地問題の解決を待つように呼びかけていた。トルケスタン委員会が6月8日付で、セミレーチエ州コミッサールへ宛て、国有地の管理にあたる官吏に「現行法に従い旧来の職務範囲で」勤務を続けることを指令しているように⁶、農民の現地での直接的行動を牽制しつつ、植民行政が継続されていく。セミレーチエ地区移民事業事務取扱いのコールサコフは、4月に農相に宛てて、セミレーチエでは「入植地区形成に係る十年間の無秩序な活動」のため、「土地関係が全く混乱し」、原住キルギス人、コサック、新旧の移民と全ての住民が不満をもっていると訴えていたが⁷、臨時政府とトルケスタン委員会は、旧来の植民行政の軌道上を動いていくのである⁸。

従って、帝政ロシアの最後の総督クロパトキンの下で策定されたセミレー

チエの植民計画も確認され継承されていくことになる。クロバトキンは既に、帝政末期に承認を取りつけていたセミレーチエ州の植民計画の実施を臨時政府にも求めていた。陸相のグチコフは3月18日の閣議にこの問題を提起し⁶⁾、4月10日の閣議では、最終決定はトルケスタン委員会と現地に委ねるとしながらも、この植民計画の実施を承認した⁷⁾。一方、トルケスタン委員会は、M. トゥイヌィシュバエフの報告を聞き、この計画の実施を決定し、4月22日には臨時政府へ議長の新チェプキンと委員のトゥイヌィシュバエフの名で、この計画の実施に着手したと打電した⁸⁾。5月4日から6日にかけて、さらに現地ピシュペクでこの計画の実施をめぐる特別会議が開かれた。この会議には、セミレーチエ州の二人のコミッサール、シュカブスキーとトゥイヌィシュバエフの他に同州のカザフ民族主義の指導者 И. ジャйнаコフ、トルケスタン委員会を代表してメンシェヴィキの И. Н. Шендриコフらが参加した。会議は、イシ＝クル湖の盆地、大小のケベニ谷、アク＝ピケット地区などへ、原住民の中国からの帰郷を許さず、彼らを他地域へ移すと確認決定した⁹⁾。

このように、4—5月にトルケスタン委員会の下で、1916年蜂起の鎮圧過程で策定されたセミレーチエの懲罰的な隔離植民計画の実施が確認された。総督のクロバトキンなきあとの、彼の統治体制の実質的継承であった¹⁰⁾。だが、トルケスタン地方では5月の徴用令の廃止をうけて、ムスリム徴用者の帰郷と彼ら「後方徴用者 **тыловики**」による社会運動の活性化がみられ¹¹⁾、セミレーチエ地方では、さらに、1916年蜂起で中国へ避難したムスリム牧民の帰郷がはじまり¹²⁾、ロシア人入植者と原住民の間に緊迫した状況が生み出されることになった。既に5月5日にセミレーチエ州から「懲罰隊を連れ、山地と中国へ逃亡したキルギス人がセミレーチエへ戻ってきている。武装した移住農民は昨年の暴動への復讐を果しつつ、戻って来る彼らを銃で殺している」と中央へ打電されていた¹³⁾。このような状況のなかで、5月初めブルジェヴァリス郡で一連の虐殺事件が繰り返された。例年通り、セミレーチエのけし畑で働くため、中国領からドゥンガン人の一隊が同郡へ向ったが、イシ＝クル湖東岸のブルジェヴァリ斯克市近郊の入植村落では、彼らが略奪を

はたらこうとしていると噂さが広まった。入植農民は急拠、武器をとり、作男としているキルギス人を虐殺し、約 200 人が殺されている¹⁴⁾。イシ＝クル湖南岸中部のバルスコン Барско́н 地方でも、入植農民によるキルギス難民虐殺事件が起きている¹⁵⁾。ロシア人をはじめとする入植農民と賜暇兵士は、彼らの略奪・殺害も辞さず、飢えたキルギス人を連行し、無償で作男として使役し穀物も与えようとしなかった¹⁶⁾。原住キルギス人の 17 郷の代表は、5 月 18 日にプルジェヴァリスク市から、タシケントのトルケスタン労兵ソヴェトへ、次のように電文で訴えざるを得なかったのである。

「キルギス人は旧政府の犯罪的行為のために中国へ遁れざるをえなかった。自由、公正、平等、友愛の太陽が登り、革命の政府は我々が祖地へ戻るのを許し、我々は全てロシアへ帰った。しかし、〔入植〕農民は、ふるくからの土地へ我々が戻るのを許さず、殺人、強制連行、略奪をもって我々を脅している。

我々は皆、山地に暮し、穀物も何もなく飢えて死につつある。ヴェルヌイとナルゥインの郡へ我々を移そうとしていると聞いた。我々には移動する力はなく、辿り着く前に途中で滅びるであろう。自由、平等、公正の名において、我々の運命に配慮されることを請う。我々を救済し守りたまえ。我々を移転させず、我らの郡に留め置き、農民と和解させることを切に請う。我々を自分たちの土地に住まわせることを願う。」¹⁷⁾

このようなセミレーチエの緊迫した事態に素早く、積極的に対応したのは、タシケントの労兵ソヴェトとムスリム諸組織であった。タシケントのトルケスタン地方労兵ソヴェトは、4 月 30 日から 7 月 7 日までの全支出の 31% をセミレーチエ問題にあてているが、これは同ソヴェトの機関紙出版経費を越えて、最大の支出項目であった¹⁸⁾。同ソヴェトは、4 月末に、旧体制の「分割し統治せよ」という支配の鉄則を住民に説明し、「原住民とロシア人の融和 слияние」を図るため、セミレーチエ州の各郡へ、代表を派遣することを決定している¹⁹⁾。プルジェヴァリスク郡住民の武装化には、「全くロシア人の武装」と認定し、彼らからの武器の回収を決定し²⁰⁾、セミレーチエのキル

ギス人の移転へは、「悲惨な事実」とみなし、彼ら原住民への「食糧の保障」が必要とした²¹⁾。中央へは、タシケント労兵ソヴェト議長のΓ. И. ブロイドを派遣し、ムスリム組織との連絡と法相ケレンスキーとの交渉にあたらせ、中央の臨時政府とトルケスタン委員会のセミレーチエの事態に対する無策ぶりを非難する決定を行っている²²⁾。他方、ムスリム諸組織にも、セミレーチエの事態は広く知らされ、抗議を呼びおこすことになった。1917年5月にモスクワで開かれた第1回全露ムスリム大会は、トルケスタン委員会へ宛てて、次の電文を打った。

「全露ムスリム大会は、セミレーチエのキルギス人に関して非常に重苦しい知らせを受け取った。旧体制下で、懲罰隊によって山地に追いやられ、一部は中国へ逃亡した彼らが、身包はがれ、飢え病んで戻って来ている。政府により武装された移住農民は、昨年の騒乱の復讐として、彼らが住みつくのを認めず、戻って来た彼らを銃殺し、彼らへ援助を与えるのを許さない。ロシア人とキルギス人のコミッサールを、軍司令官と共に直ちに派遣し、資金の提供と食料・衣類の配給を行うことが必要である。」²³⁾

セミレーチエの深刻な事態は、タシケント、ペトログラード、モスクワへと伝わり、波紋と抗議を呼んだが、現地セミレーチエでは、5月初めのピシユベク会議の決定をふまえて、懲罰的な隔離入植が強行されていく。二月革命後、当州の行政権を執ったのは、州コミッサールとして派遣されたシュカプスキーとトゥイヌィシュパエフである。5月には、当州の緊迫した状況を考慮して、彼らの統治を補強するために、第三のコミッサールとしてメンシェヴィキーのИ. И. Шендрикอฟらが、トルケスタン委員会によって派遣されている²⁴⁾。この彼らの新しい統治の下でも、旧来の植民地機構は温存され、その移民局を中心とする植民地官僚から、新しい郡と地区の役人も任命され²⁵⁾、カザフ人民族主義者を介してムスリム原住民の支持を取りつけつつ、クロパトキンの植民計画は実施に向うのである。ピシユベク会議を終えて、5月13日に、トゥイヌィシュパエフとシュカプスキーは、中国から帰還したプルジェヴァリスク郡の飢えた7万人のキルギス人を、ナルウイン、ヴェル

ヌイ、ヂャルケント郡へ移転させる決定を出した²⁶⁾。6月末には、彼ら両コミッサールは、カシュガルのロシア領事館へ「近い将来、キルギス人のロシアへの帰還は望ましくない」と打電し、彼らの帰郷を阻止し²⁷⁾、入植農民の救済と損害補償に尽力しつつ²⁸⁾、6月から7月に原住カザフ、キルギス人の大規模な追放・隔離に着手していくのである。州コミッサール、シュカプスキーのキルギス人移転指令に、プルジェヴァリスク郡執行委員会は、「ピシュペク会議の決定に従って、キルギス人の追放に着手している。追放に関する全権代表にヴォイシュヴィロ Войшвило が任命された。通報して、可能な援助を請う」と返電している²⁹⁾。

エス・エルとメンシェヴィキーの協調派社会主義者とカザフ人民族主義者の政治的指導の下で、植民地官僚機構を継承して築かれたセミレーチエの協調体制と、このような施策は、原住ムスリム牧民への抑圧の体制でもあり、植民地のロシア人をはじめとする入植者の社会は、この地方の鋭い民族的な社会的敵対のなかで、この体制をとりあえず容認し、受け入れたのである。6月のヂャルケント郡農民大会では、エス・エルとメンシェヴィキーの主導で、州に民族クーリアを設け、原住民の市民権を制限することが決定されていた³⁰⁾。六月末の州農民大会へ向けての入植農民の要求は、土地の私的所有を廃し、「勤労人民の財産」とし、勤労原理による土地用益の実現を主張するものであった³¹⁾。ここには、植民地の土地問題の特殊性への認識はなく、勤労原理に基づく土地用益実現の主張の裏に、原住牧民と特権的コサック身分の土地への占拠志向を秘めていたのである。6月29日から7月24日まで、セミレーチエ州の第一回農民大会が開かれ、エス・エルの提案で、臨時政府支持と戦争の勝利までの遂行が決定されるが³²⁾、同時に、この大会は、セミレーチエの協調体制下での植民政策を容認したのである。原住キルギス人との関係が審議された大会の場では、代議員は口々に「キルギス人を他の場所に移し」、「ロシア人から隔離すること」、「キルギス人全てを平穏な人々と叛乱を起こした人々に分別し、後者をロシア人から隔離すること」、彼らの中国からの帰還を認めず、「村にいる軍隊は〔キルギス人の〕飢餓一撻にそなえて現地に留めること」などを求めた³³⁾。そして、次のように大会で決議さ

れた。

「民族的敵対は説得 агитация によって、解消すべきである。完全な和解が達成できないところでは、キルギス人住民をロシア人から隔離しなければならない。極端な場合には、一時的にキルギス人を別の場所へ移さなければならない。プルジェヴァリスク郡で起こりうる衝突を防ぐために、当地の義勇隊 дружина、中隊、コサック騎兵隊を増強し、通過点には哨所を設置する。」³⁴⁾

労兵ソヴェトも、この農民大会に先立って6月4日から16日まで、第一回州大会を開き、協調派社会主義者の立場から、臨時政府支持を表明している³⁵⁾。植民地セミレーチエの労兵ソヴェトも、州都ヴェルヌイの労兵ソヴェトにみられるように、勤労農民への土地移譲の要求以上の、植民地の特殊な土地問題への認識はもっていなかったのである³⁶⁾。

しかし、このようなセミレーチエの協調体制は、植民地の強固な社会基盤に根ざしているのではなく、ロシア人をはじめとする入植農民、都市住民、コサックなどの移民社会と原住ムスリム牧民社会の不安定で流動的な支持と容認、その社会力学的バランスの上に築かれたものであった。セミレーチエのこの体制は、中央の臨時政府が連立を重ね、トルケスタン委員会も6月に、その議長をカデットのシチェプキンからメンシェヴィキーのB. П. ナリーフキン Наливкин に交替するなかで³⁷⁾、存続していく。だが、協調派社会主義者がカザフ民族主義者の支持をとりつけて、植民地官僚制を継承してつくられたこの体制は、その政治・官僚的外皮の内に、その殻を破る植民地民衆の自立(律)的動きを孕んでいたのである。この動きは、1917年夏一秋に顕著となり、セミレーチエの協調体制を脅すことになる。

セミレーチエの入植農民は、原住ムスリム牧民への攻撃と抑圧を続けながら、移民局の管理する国有地やコサックの土地へも占拠志向を募らせ、協調体制下の土地問題解決の合法的手順一枠組を越えて動き始めていた³⁸⁾。だが、夏から秋にかけて、セミレーチエの協調体制を鋭く脅したのは、この入植農民社会と密接に結びついている兵士と都市民衆の動きであった。入植農

民から輩出されるセミレーチエ出身兵士は、休暇を得て帰郷すると、原住ムスリムへの攻撃を加速させていたが³⁹⁾、都市では動員への強い不満から出征忌避や脱走が、彼らの間で起きていた。6—7月のロシア軍の夏期攻勢の時期に、ピシュペク、ヴェルヌイ、レプシンスク、トクマク市で、彼ら兵士は一連の出征拒否の兵擾を起こした⁴⁰⁾。とりわけレプシンスク市では、7月3日から一週間にわたって同市が占拠され、彼らは郡部をも影響下におこうとし、地方当局に大きな衝撃を与えた⁴¹⁾。セミレーチエ出身兵は、タシケントの九月事件の担い手ともなり、トルケスタン軍管区司令部も、彼らの危険な性格を察し、その除隊＝解体を10月には決意せざるをえなかった⁴²⁾。1917年秋にセミレーチエ州に駐屯する守備隊兵士5,900の大半は、義勇隊 дружинаであり、彼らは農村の強い影響を受け、出征忌避、帰郷・営農への志向が強く、秩序の維持を最早や彼ら「地方兵士 местные солдаты」に期待することは出来なくなっていた⁴³⁾。他方、植民地セミレーチエの都市住民も、その多数は出自からして、入植地を見い出せず都市の「町人」に転籍せざるを得なかった移民であり、彼らは都市にありながら農業に従事していた。彼らは秋に一連の都市で、食糧と日常物資の確保を求めて激しい動きを示すようになった。10月8日に州都ヴェルヌイで、10月16日にはピシュペク市で、彼らは兵士を加えて、食糧を差し押さえ、物資の市からの搬出を阻止し、この騒擾のため両市に戒厳令が布告されることになった⁴⁴⁾。

このような入植農民、それと密接に結びついた兵士と都市住民の激しい動きに反発し、警戒の念を強めたのは、セミレーチエのコサックと原住ムスリムであった。コサックは、入植農民をはじめ土地を求めて移住して来た民衆によって、自らの「自由と特権」が失われるのを恐れ、コサック兵村での非コサック身分を含めた自治体の形成に反対し、コサックの身分的「自治」に固執し、他の辺境コサック軍団との連携を強めつつ、反革命へ傾斜していく⁴⁵⁾。他方、ムスリム住民の体制への不信も昂じていく。ヴェルヌイ郡コミッサールは、既に7月に「カザフ人の許では、今や新しい体制が、ロシア人住民にのみ保護を与えているとの疑念がある」と指摘していたが⁴⁶⁾、10月23日には、州都ヴェルヌイからタシケントへ、「キルギス人は臨時政府コミッサー

ルのシュカプスキーとトゥイヌィシュパエフへ不信を表明した」と打電されている⁴⁷⁾。さらに、土地問題では、8月2～5日にタシケントで開かれたトルケスタン地方キルギス人大会は、「キルギス人自体の土地整理が終るまで、土地収用は直ちに停止せねばならない。……(中略)……移民入植区で、まだ入植の行れていない盆地はキルギス人に返却しなければならない」と決議し⁴⁸⁾、入植農民の土地要求とは異なる反植民主義の方向を打ち出したのである。そして、8月18日には、タシケントで、セミレーチエでの原住ムスリムへの暴圧に抗議するムスリム民衆の示威行動が行われた。

だが、セミレーチエの協調体制の下で進行する植民地民衆の自立(律)化に対処する力は、最早、トルケスタン当局にもセミレーチエ州当局にもなかった。トルケスタン委員会議長のナリフキンは、8月18日のムスリム民衆の抗議の翌日、首相ケレンスキーに、「今、我々は武器をもたないキルギス人へのロシア人移民の暴行を阻止する断固たる措置をとると決定した」と打電した⁴⁹⁾。つづいて、彼は、ロシア人移民から「全ての土地を勤労者へ」と叫ばれ、農業調査が行れるなかで不安を募らせている原住ムスリムに対して、「我が政府」を信頼せよと訴えざるをえなかった⁵⁰⁾。しかし、中央のケレンスキー政府も、タシケントのトルケスタン委員会も、辺境の植民地セミレーチエで進展する協調体制の危機に対処する余裕も実力もなかった。10月8日にヴェルヌイで開かれたセミルーチエ州の郡コミッサール会議では、「郡の行政の状況は、全く定まらず、行政命令が執行される保障はない。原住民は自衛に向おうとし、非合法に武器をえている」と⁵¹⁾、統治の危機が指摘されていた。

辺境の植民地セミレーチエでは、このような状況のなかで、中央ロシアの両首都とタシケントでのソヴェト権力の樹立をうけて、革命は新たな展開をみせることになる。

注

- 1) «Победа Октябрьской революции в Узбекистане», сборник документов, Т. I, Ташкент, 1963, № 36, с. 57-58.
- 2) К. Е. Житов, Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Туркестане. «Исторические записки», т. 61, 1957. с. 194. 著名な東方学者

- В. В. パルトリドを含めトルケスタンの「進歩主義者 прогрессисты」は、トルケスタンへの自治付与を帝政ロシアの下での全ての「進歩的」事業を無に帰せるものと危惧し、自治を否定していた。В. В. Баргольд, История культурной жизни Туркестана. Л., 1927, с. 143. прил. 3. さらに、英仏型の植民地経営とは、カナダ、オーストラリアなどの「文化的住民」(白人)の植民地とは区別された、英仏のアジア植民地の統治を念頭においてのことであった。П. Алексеенков, Национальная политика..., с. 107-108.
- 3) «1917 год в Казахстане». документы и материалы. Алма-Ата, 1977, № 76, с. 111-112.
 - 4) Там же, № 29, с. 66-67.
 - 5) 臨時政府は6月15日に内相の私的審議会で、トルケスタン問題を審議している。これには帝政ロシアのこの問題の権威 В. И. Масариский 公も参加して、政策の継承性を窺わせるが、専らトルケスタンの都市と地方に自治を導入することが審議された。トルケスタン委員会議長のシチェブキンの提案した、ロシア人とキルギス人の関係、土地問題の議題は、関係各庁から説明されたにすぎなかったのである。《Победа Октябрьской революции в Узбекистане», Т. I, № 127, с. 138-141.
 - 6) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья..., с. 82.
 - 7) С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье, с. 64. この日の閣議で、ジザック郡の2000デシャチナの土地の原住民からの没収とロシア人の入植という、クロバトキンのもう一つの懲罰的植民計画は廃止となった。С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов..., с. 83.
 - 8) Там же, с. 84; С. Н. Покровский, Победа советской власти..., с. 64.
 - 9) Там же, 64; С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов..., с. 84-85.
 - 10) このことを示すかのごとく、四月末に首都ペトログラードで、クロバトキンは、首相リヴォフ、法相ケレンスキー、農相シンガリョーフに厚遇されている。Из дневника А. П. Куропаткина, «Красный Архив», 1927. т. 1 (20), с. 65-66.
 - 11) 1917年5月5日に、臨時政府は、後方徴用労働者の帰郷を決定した。《Победа Октябрьской революции в Узбекистане», Т. I, № 78, с. 98. 既に逃亡し、不法に帰郷したものを含め、5月末から6月にかけて、トルケスタンでは約12万人が帰郷し、彼らは都市と農村で、ムスリム民衆の動きを活性化することになる。
 - 12) 1917年に、中国からセミレーチエ州へ、1916年蜂起の難民10万人が戻って来た。Материалы объединенной научной сессии, посвященной истории Средней Азии и Казахстана эпоха социализма. Алма-Ата, 1958, с. 210.
 - 13) Крестьянское движение в 1917 году. М.-Л., 1927, с. 80.
 - 14) П. Алексеенков, Национальная политика..., с. 117, 121.
 - 15) «Победа Октябрьской революции в Узбекистане», Т. I, № 109, с. 124.
 - 16) Г. Сафаров, Колониальная революция. (опыт Туркестана), М., 1921, с. 57.
 - 17) П. Алексеенков, Национальная политика..., с. 120-121.
 - 18) «Победа Октябрьской революции в Узбекистане», Т. I, № 165, с. 169.
 - 19) Там же, № 55, с. 80-81; П. Алексеенков, Национальная политика..., с. 118-9.

- 20) 《Победа Октябрьской революции в Узбекистане》, Т. I. № 93, с. 109. 州全体で、農民部隊が編成され、移民が武装化されたが、ブルジュヴァリスク郡では、450挺のライフル銃と15万発の実包が移民に渡されていた。С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья..., с. 85.
- 21) 《Победа Октябрьской революции в Узбекистане》, т. I, № 109, с. 123-4.
- 22) 6月3日のトルケスタン地方労兵ソヴェトの決定は、「ソヴェトのメンバー、ブロイドはケレンスキーに一連の措置を提案した。ケレンスキーは認めたが採用しなかった。トルケスタン委員会は弱体で確固としていない」と非難していた。Там же, № 114, с. 127. ブロイドの活動については、次を参照せよ。J. Castagné, Le Turkestan depuis la révolution russe, p. 31.
- 23) П. Алексеенков, Национальная политика..., с. 118.
- 24) 同時に、ブルジュヴァリスク郡にメンシェヴィキーの П. И. Шебарин Шебалин, Левшинск郡にエス・エルの П. Н. Барзукин Бабкин が郡コミッサールとして送りこまれている。《1917 год в Казахстане》, с. 10; № 71, с. 108. Шендрикوفの州コミッサールとしての正式の認証は、6月15日以降となる。《Победа Октябрьской революции в Узбекистане》, Т. I, № 127, с. 140.
- 25) А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизии. Фрунзе, 1931, с. 24.
- 26) 《Великая Октябрьская социалистическая революция и гражданская война в Киргизии[†](1917-1920 гг.)》, документы и материалы, Фрунзе, 1957, с. 11; 《Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане в 1917-1918 годах》, сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1957, с. 380.
- 27) 原住民のセミレーチエ州への帰還は、国境警備隊の弾丸で迎えられることになる。С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья..., с. 88; Б. С. Сулейменов, ред. Восстание 1916 года..., с. XIII.
- 28) セミレーチエの州郡当局は、1916年蜂起被災者への損害賠償の遅れが、不穏な状況を醸出しているとの現状認識に立ち、被災者である入植農民への援助と補償の必要を力説していた。Шукапскийは、トルケスタン委員会へ宛てた報告のなかで、「反乱の結果を清算する第一の措置は、キルギス人が農民にもたらした損害を賠償することである」と指摘していた。П. Алексеенков, Национальная политика..., с. 119-120. 又、ブルジュヴァリスク郡執行委員会議長のカラコーゾフは、タシケント労兵ソヴェト議長ブロイドのキルギス人擁護に反感を示しつつ、「執行委員会は、焼かれ掠奪され、不具にされたロシア人住民の擁護の側に立つのを道義的義務と考える」と、8月初旬に中央へ打電していた。《Крестьянское движение в 1917 году》, М.- Л., 1927. с. 256.
- 29) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья..., 87-88.
- 30) Там же, с. 87.
- 31) 《Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане в 1917-1918 годах》, № 54, с. 87; № 63, с. 99.
- 32) С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье. Алма-Ата, 1961, с. 78-79.

- 33) С. Брайнин, Ш. Шафиро, Восстание казахов Семиречья..., с. 87.
- 34) А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизии (северная часть), с. 25.
- 35) С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье, с. 78-79.
- 36) «Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане. 1917-1918 гг.», № 13, с. 50-51.
- 37) К. Е. Житов, Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Туркестане. «Исторические Записки», т. 61, 1957, с. 197.
- 38) 入植農民, とりわけ親規移民 новоселы は, 原住牧民とコサックの土地の占拠に向けて激しく動いている。А. Зорин, Эпизоды из истории гражданской войны в Киргизии. «Борьба классов», 1936, № 9, с. 45; С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье, с. 65, 82-83.
- 39) А. Н. Зорин, Революционное движение Киргизии, с. 22-23.
- 40) С. Н. Покровский, Победа советской власти..., с. 82, 90-91; Д. И. Сойфер, солдатские массы..., с. 62-63; А. Г. Зима, К вопросу об установлении советской власти в Киргизии. «Материалы объединенной научной сессии, посвященной истории Средней Азии и Казахстана эпохи социализма», Алма-Ата, 1958, с. 126; «1917 год в Казахстане», № 73, с. 109-110; № 84, с. 117-8; № 109, с. 145-6.
- 41) レプシンスクの七月事件は, 農作業のため休暇をえていた 40 才の兵士と徴兵免除者が, З. К. Дегтярев の指導で, 出征を拒否した事件である。彼らを行動へ駆りたてた一つの動機は, 出征後の入植村落へのキルギス人の襲撃を警戒する意識があった。従って, 彼らは事件のなかで, キルギス人からの「自衛」と称して, 部隊の編成を決定している。《Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане. 1917-1918 гг.», № № 65, 66, 67, с. 101-105. キルギス人からの自衛というこの意識は, セミレーチエ出身兵のなかに深く根づいていた。См., «Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Туркестане», сб., документов, Ташкент, 1947, № 83, с. 79.
- 42) Д. И. Сойфер, Солдатские массы, с. 71; Г. Сафаров, Колониальная революция, с. 65: «Победа Великого Октября в Узбекистане», Т. I., № 553, с. 514-5; № 528, с. 492.
- 43) С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье, с. 80-82, 97-98. 10月3日付のトルケスタン軍管区司令部の陸相宛電文では, 軍管区の「兵士の雰囲気は緊迫しており, 全体として, どのようなデマゴギー的呼びかけにも容易に応じる状況がみられる」と伝え, 「そのような雰囲気を促しているのは, セミレーチエ出身兵士が非常に多くいるということであり, 彼らは到る所で, 極めて有害な分子である」と指摘していた。《Победа Великой Октябрьской соц. рев. в Туркестане», № 83, с. 78-79. 10月25日にトルケスタン軍管区司令官は, セミレーチエ州軍司令官にヴェルヌイの義勇隊 дружина の武装解除と兵營のコサック部隊への引渡しを指示した。この電文に州軍司令官は, 「セミレーチエ出身兵 семиречи から成る義勇隊は自ら消滅しつつある。彼らは全て家路に散るであろう。」と書きこんでいるのである。《1917 год в Казахстане», № 160, с. 185-6.

- 44) С. Н. Покровский, Победа советской власти в Семиречье, с. 98; «Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане. 1917-1918 гг.» № 118-9, с. 146-7, прим. 1.
- 45) «1917 год в Казахстане», № 63, с. 99-101; С. Н. Покровский, Победа советской власти, с. 92.
- 46) М. Ким, Октябрьская революция и аграрный вопрос в Казахстане. «Вопросы истории», 1947, № 10, с. 91.
- 47) «Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане. 1917-1918 гг.» с. 14-15.
- 48) П. А. Алексеенков, Национальная политика..., с. 126-7.
- 49) Там же, с. 123; «Революционное движение в России в августе 1917 г.», документы и материалы, М., 1959, № 351, с. 348.
- 50) «Победа Октябрьской революции в Узбекистане», Т. I, № 248, с. 255-256.
- 51) «Победа Великой Октябрьской социалистической революции в Казахстане, 1917-1918 гг.», с. 13.

結びにかえて

セミレーチエをはじめとする中央アジアの革命は、1916年のムスリム蜂起によって始まった。これは、原住ムスリムを主体とする第一の社会運動の波であり、続いて、入植農民を中心とするロシア人の第二の社会運動が、中央部ロシアの二月革命後の影響をうけて展開することになる。植民地セミレーチエでは、この二つの社会運動の並存・対抗・交錯のなかで革命は展開していく。中央部ロシアの十月革命の衝撃のなかで、セミレーチエでは、入植農民を中心とするロシア人社会に反発し不信を募らせたコサック軍とカザフ人民族主義者が、軍事独裁を樹立した。この軍事独裁を破って、1918年春～夏にソヴェト権力を樹立するのは、入植農民と都市住民であった。植民地のこのソヴェト権力は、移民の入植社会に深く影響され、土地問題や民族問題で「偏向」を犯すことになる。このようにして、植民地セミレーチエでの革命は、中央からの衝撃を受けながらも、地域の内在的社会力学を基本動因として、その自立(律)性を強く示すのである。この革命の自立(律)性と、そこにみられる二つの運動の並存性は、内戦の終わる1920年から解消に向う。即ち、中央からの政治的圧力の下で、セミレーチエでは、この並存性を打破するために、党とソヴェトの「土着化 коренизация」が唱えられ、民族問題

での「偏向」が指摘され、土地改革（1921～22年）が着手されるのである。

このような観点から、辺境植民地セミレーチエの革命全体を展望すると、1916年のムスリム蜂起を帝政ロシアの異民族支配の矛盾ととらえながらも、それと切り離して二月革命の波及から革命を叙述するのではなく、この蜂起を革命の直接の始まりと位置づけるのが適切と思える。そして、トルケスタン地方で最大の犠牲を払ったセミレーチエ南部のこの激しい反乱を「反動的」と性格づけ、反乱全体から分離・特殊化するのではなく、その内在的理解が求められているといえよう。この論文では、「誓約」を交わし、部族 подご とに結集し、自らのハンを推戴して戦う原住牧民に言及したが、その内在的理解にはまだ程遠い。さらに、革命の自立（律）性とその過程の並存性という観点から、クロバトキンのセミレーチエ植民計画が、二月革命後のトルケスタンの協調体制の下でも、実質的に継承されていくことの意味も重大である。即ち、二月革命が、辺境植民地セミレーチエにとって、地方高官の更迭・交替以上の何らかの「革命」の意味をもちえたのか、あるいは、革命史の叙述の始点をどこに置くべきかを、鋭く問わねばならないであろう。

辺境植民地をはじめ、帝政ロシアの多様な地域での革命の展開を、後に政治を独占する共産党の「指導」、中央と地方の革命の「一体性」、という枠組に機械的に押し込めるのは、プロクルステスの寝台での裁断に似て、知的無謀とさえ思える。現在ソ連で進行するペレストロイカのなかで、党の「指導」が問われ、政治的プルラリズムが模索され、民族共和国をはじめ地域の自立と分権が叫ばれている状況のもとで、ロシア革命史研究に於いても、単一の党の「指導」と革命過程の「一体性」論の知的枠組自体が再検討され、新しいロシア革命像とその全体的枠組の構成が求められているといえよう。